

---

# ノルンの足枷

Ainia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノルンの足枷

### 【Nコード】

N3670E

### 【作者名】

Ainia

### 【あらすじ】

何処にでもあるような日常が、不図した事で姿を変える。噛み合わない歯車が、呻き声を上げて回り始める。

ACT・1 青天霹靂（前書き）

初めましてアイニヤです。

当作品が私の処女作となります。

基本的にはライトノベルの執筆に近い形式で文章を綴っていますので、縦読みで読んで頂いた方が雰囲気が出るかもしれません。

また、暖かい目で見守ってやって下さいというお願いと共に、今後の連載において出血などの表現が含まれる可能性がある旨をお伝えします。

それではお楽しみ下さい。

ACT・1 青天霹靂

千を守る為に一を殺す事が悪なのか？

一を守る為に千を殺す事が悪なのか？

世界はそれらを認めない。

認められるのは私だけ。

M i l s h e l c    A i n i a

始まりはいつもそうだった。

茜色の空の向こうにありもしない理想郷を願った。その瞬間の一部始終をこの身に刻んでただひたすらにもがいてたんだ。

丁度一年前。彼は、何の便りも寄こさないままこの町を去っていった。

彼に積み重ねられた罪はどれほどに重いのか、その時初めて気付いたんだ。

それ以来、私はこの御上市でどうにも詰まらないマンネリ化した日常を過ごしていたんだ。

黎明も過ぎぬ間に広がる薄霧の中、町中を日の光が色取り取りに彩っていく。霧で出来た雲海は、微かに朝の予兆を匂わせる。

道路、ビル、住宅街。その各々が朝を迎える度にそれぞれの色に染まり、それは夕暮れと共に常夜に沈む。

それはごく当たり前でこの世の日常、どこにだってある景色だった。

午前零時を境に一日という習慣単位が入れ替わり、また新しい一

日に興奮する人間もいれば、勿論その繰り返しに疲れきった人間もいた。

しかしその日常も、運命という容赦もない神の試練によって軽々と覆される。

そう、始まりはいつもそうだった。

茜色の空の向こうにありもしない理想郷を願った。その瞬間の一部始終をこの身に刻んでただひたすらにもがいてたんだ。

列を連ねたカラスたちが我が家へと帰路を辿る。沈みかけた太陽は雲に隠れ、ぼやけた灯が隙間から射し光る。

「ねえ凧ちゃん？」

公園に植えられた木々の葉がそよ風にざわめく。

「藤崎くんの事なんだけどさ……」

公園のブランコに二人の学生。ゆらゆら揺れて会話を交わす。

「私の事どう思ってるのかな？」

一人の少女が一方的に言葉を並べ、もう一人の少女に尋ねる。

ここ最近の口癖になっている事にも気付かない問い掛けた少女は、何気なく空を見上げる少女の返答を待つ。

「どうって……ね」

髪を二つに束ねたツインテールの愛は、愛想の無い返事に頬を膨らませて隣に座った少女の顔を見つめる。

「何よ、その呆れたような顔は……」

怒った風を装うが、隣の凧なやはそのままの調子で言葉を返す。

「うん……そのね、今さっきまで誰とどうしてた？」

他愛もない会話が二人の時間を刻んでいく。

「凧ちゃんと公園入って……」

「その前っ」

声を荒げて愛の言葉を遮る。途端、強風が木々を吹きさらして過ぎ去った。

「えーっと」

両の人差し指を頬に押し付けて、満面の笑みで続く言葉を紡ぐ。

「藤崎くんといチャイチャ……ぐっ」

愛の頭頂に呷咲の手刀が振り下ろされた。

「いったーいっ」

ツインテールの少女は頬からズレた両手で頭を抑え、装いの涙目で目の前の少女を見つめる。

「どうして叩くのよ」

「もう一回叩かれない？」

「遠慮します」

愛の悪気満々な言葉に、何処か異様な雰囲気醸し出す呷咲の満面の笑顔が応対する。率直に身の危険を察知した愛は、呷咲の行動制しに移った。

「ったくもう、愛と藤崎くんがくつついて歩いてる傍を歩く私の気持ちも考えてよね」

そつぽを向いて、風に靡く髪を手榴で解く。雲間から眩しいほどの橙色が射した。

「しょうがないじゃん、付き合っつてぶっ」

再び愛の頭に手刀が減り込んだ。

性懲りもなく同意の言葉を繰り返す少女は、その結果が導き出す自らへの叱責を込めた手刀を敢えて受け、その上でもまだ男性との仲を知らしめたいのである。

「もう、痛いってば」

「はいはい」

最低限の抵抗も軽く流され虚空に消える。

白を基調としたブレザーに色取りどりのアクセントを添えた幾つもの装飾。

二人の少女はそのブレザーに身を包んで揺られていた。

「私だってね、空さえいてくれれば……」

呷咲の漏らした言葉を聞いた途端、愛の身体が硬直と微々たる震

えに変わる。

「ま、まだ彼の事を……？」

「うん」

即答。

今まで以上に陽気な笑顔で雲間から射す光とその下に広がる街並みを見渡す。高地に設置された公園からは街が一望出来た。

「空は絶対あんな事しない……愛だって、多分……」

不意に流れ込んだ一つの会話が、二人の間の空気を重くする。

木々を揺らし、髪を靡かせていた風が嘘のように止み、代わりに沈黙を置いていった。

「ごめん……そろそろ帰ろっか？ ホントごめん、気にしないで」

俯き顔を上げようとしない少女に気をかけ、言葉を選定するが少女の反応は鈍い。

「風守くん……か」

かすれるような小さな声は、確かな余韻を残しながら広がっていく。

「帰って来たら……いいのにな」

「えっ」

予想だにしない言葉が紡がれ、動揺を露にする。

「うん……」

ゆっくりと加減を弱くする動揺は相槌の意味を不覚した。

それから二人は徐にブランコ台の上に立ち、大きく蹴って飛び立った。

街の光にぼやけた夜空に微かな星々が煌めく。夕暮れに満ちた雲は流れていた。

風咲は家に着き「ただいま」の挨拶と共に「おかえり」の返事を受け取る。

いつものように風呂場に向かってシャワーの蛇口をひねり、スタスタと制服を脱ぎ捨てた。

長くしなやかな黒髪が艶やかな肌にかかる。出っっぱなしのシャワーから溢れる水は、緩やかに熱を帯びた温水に変わる。

(冷ったーい)

「気持ちいい」

掌にシャワーを浴びせ、副音声を胸に秘めて快感を言葉にした。

熱を持ったとはいえ殆ど水に近いそれは、夏盛りの季節には心地良い刺激を与える。

腕や足などの末端から胴体に向かって洗っていく。

その後で体全面にシャワーから溢れる水を被り、髪の毛に潤いを齎した。

スツと髪の毛が縦に落ち、髪に当たった水を吸い込むようにして滴り落としていく。

瞼を閉じて顔面にシャワーを浴びる。弾いた滴が綺麗な弧を描いて床に落ちた。

濡れた髪が纏まる。砂埃に吹き晒された髪は求めるようにして水分を奪った。

「空、今どこに……？」

風呂窓の隙間から覗く星空は静か。サラツと揺れる木の葉。閉じ瞼のような太い三日月が御上市を照らしていた。

汚れを洗い流した体。付着した滴を拭き取り、バスタオルを体に巻き、一回り小さなタオルを頭に被せて風呂場を出る。

コツコツとまな板を叩く音が響き、ふんわりとスパイスの香りが漂った。

「ねえお母さん？」

階段を昇りながら声を高らかに上げる。床は木製の為か小さくキシキシと軋む。

「進路っていつ頃決めた？」

私室に入り、箆笥から綺麗に整えられた服を取り出す。

下着を着用し、薄手の白いシャツに黒みがかかった赤いラフなズボ

ンを合わせる。

服の上からでも微かに見てとれる体のラインは標準女性の体型に重なり、胸の発育だけが気になっていた。

しかし、俗にまな板と呼ばれる程ではなく、愛や周囲の女性陣と比べると、つい見劣りしてしまう程度である。

それでも彼女は比較的人気があり、男女間の会話に分け隔てなく接する様は、雄弁な会話の架け橋として成っていた。

「どうしたのよ？ 凧咲は華奈大学行くんでしょ？」

腕を止めて応じる母親の声。父親は外交事業の仕事の為に幾つもの国を転々と回っていた。

多忙なのか、家に戻るのは年に三回程度。妻子の誕生日と結婚記念日ぐらいである。

その為、凧咲は人生の大半を母親である千代ちよに女手一つで育てられた。

幾つもの苦難もあったが、本人の凧咲は何不自由なく過ごしてきたと自負している。

「そうなんだけどさー、高校になって色々あるとね……」

服を着る際に捨て置いたタオルを拾い、風呂場に投げ込みリビングに移動した。

木製の床は暖かい質感を持ち、窓から吹き抜ける風が風呂上がりの凧咲の身体を冷やす。

「どこか、気になる進学先でもあるの？」

母親は出来上がった夕食を食卓に運びながら、ソファに座り込んだ凧咲を食事へと催促する。

箸とグラスを用意し、冷蔵庫から冷えた麦茶を取り出した。

「うーん、ちよっと一年ほど前までは皆と一緒にいいかなとかも考えてたんだけど、将来のこととかも考えるとやっぱり真剣に考えるべきかなとか思ったりもするのよね」

千代の作り上げた料理と一緒に運び、その香りに酔う。

自慢にも凧咲の母親は料理が上手い。しかも、ただ上手いのでは

なくあらゆる国に精通する腕前を持っている。

和食はもちろんのこと、欧米料理や中華料理など何をやらせてみても失敗はしない。

兎の模様がプリントされた桃色の箸。涼しさを感じさせる風鈴が描かれた透明のグラス。いかにも清涼感を漂わせる。

「いただきます」

「はい、いただきますよう」

母親はまだ若い。無邪気な笑顔は未だに周囲の男たちを惑わせる。その母親が微笑む様はまるで天使。過剰表現の賜ともとれるその表現は彼女の容姿を物語った。

外から虫たちの騒ぎ声が微かに響き、食卓に音楽を奏でていく。

「いいんじゃないの？」

口に崩したジャガイモを運びながら口を開く。

「風咲が行きたい場所にいけばいいのよ。それが進学じゃなくつてもね」

ふっくらと炊きあがったご飯と一緒にアスパラガスを巻いた肉を口へと運んでいく。

ほくほくと口を動かして、至福の時間を過ごしていく。

「始めから敷かれた道なんてないの」

秋刀魚の味醂干しを箸で突く。

「道つてのはね、踏みしめて初めて形を成すのよ。だから、風咲は自分だけの道を行きなさい」

いつの間にか千代の視線は風咲を見つめる。強い眼差しはいつもの穏やかさを感じさせない。かと思うと次の瞬間にはいつものも朗らかな様子に戻っていた。

「言ってみれば、元さんの受け売りなんだけどね」

天使が再び微笑んだ。

「お母さん……ありがとう」

千代は微笑みで風咲に応じる。

その後は終始無言で、食事を済ませた二人は各自の部屋に戻って

いった。

安閑の時間が流れる……。

特にすることもなく、ただぼんやりと星空を眺める。ぼうつとしているといつもあの景色がチラホラと映る。

丁度一年前ぐらいの暑い夏の日。

夕焼けを背にした少年が一人、並んだ死体を前に刃物を握る。

一目で怖気が走る景色に意識が揺らぐ。

空なのだろうか……。いつか祭りの日に見た服装が目の前の景色に映る。

「風守……くん？」

薄れ行く意識の中に映る少年にそつと手を伸ばした。

助けを求めたのだろうか……。今にしてみればあの時の私は何を考えていたのか分からない。

「そ……ら……」

震える声を必死に紡ぎながら、ひたすら手を前に差した。

そしてそのまま視界が闇に染まった。眼を覚ましたのは二日後の夕方。まだ日が沈みきらない頃の病院で親に伝えられた。

窓から見える景色に少年を浮かべる。

「空……」

それから一週間して空がこの街を去ったことを告げられる。

突然の言葉に私はその場で気を失ったらしい……。

私には暫くの記憶がない。

思い描いた世界は脆く。たった一度の事象で崩れ去った。

今も胸に抱く少年は同じこの星空の下に。ただそれだけは変わらないだろうと信じて、いつものようにこの空を見つめる。大きく広いこの空の名を冠した少年、かみもりくわい風守空。

いつになっても忘れない。私から何もかも奪って、どこかに去っ

ていったあの少年を……。

むせかえるような湿っぽい空気とジリジリと焼くように射す光が、刻一刻と時を刻む時計の目覚ましと共に凧咲を睡眠から引きずり出す。

「凧咲ー、休みだからっていつまでも寝てないで早くご飯食べてくれないと朝食片せないでしょ」

母親の声がリビングから廊下を通して凧咲の部屋まで響き渡る。

「はい」

適当に応じてベッドから身を起こす。途端、目の前が真っ暗になりフラッと足が沈む。

「……」

ノイズのような何かが頭に響き、すぐに視界が元に戻る。

「立ち……眩み？」

起きたばかりの血圧が下がった状態で急に立ち上がった為に立ち眩む。

ドアノブに手をかけ、頭を扉に持たれ掛ける。ゆっくりと、しかしはつきりとし始めた意識の中、ドアノブを回した。

すぐ目の前に階段。トントんと軽快に音を立てながらリビングに下りていった。

早速、椅子に掛けて朝食を片し始める。芳醇な味噌の香りが食欲をそそる。

「前日8月20日午後6時20分頃、御上市新倉町新通り三丁目、柳幸太郎さんの遺体がゴミ箱の中から発見されました」

テレビからアナウンサーの声が流れる。画面には広がった血液が染み込んだ地面とその周りの景色が映し出される。

「同日6時30分頃、御上市百合也町の蔵本さんのご自宅で蔵本雄三さんの遺体が発見されました」

音声と共に流れるニュースは、平穏な常日頃起こることの中で唯一の汚点。

「どちらとも身体を無残に刻まれ、肢体をバラバラにされ額には血で赤い模様が描かれています」

モザイクの掛かった部屋が映る。正直、モザイクをかけるなら映さなければいいものなど考える風咲をよそに、何かで聞き覚えのある音楽が流れる。

ドラマだっただろうか、音楽番組だっただろうか、いつの間にか思考は音楽の方に向けられていた。

そうしている間に食事を終え、徐に腰を上げて食器を流し台に運ぶ。食べかけの料理にはラップをかけ冷蔵庫に保管した。

自分の部屋に戻り、ハンガーに掛けてあった制服を手取る。その服をベッドに投げ出し、何かを思い出したかのように洗面所に向かった。

鏡に映るのくしゃくしゃな髪の毛。スラツと長い髪が真っ直ぐ下に垂れてはいるが、ところどころその髪の毛が跳ねている。

「あーもうっ、何でお母さん一言も……」

そう口にするより早く櫛で解く。本人が思うより簡単に跳ねは直り、ホツと溜め息を吐くとゆっくりとした調子で部屋へと戻り制服に着替えた。

「行ってきまーす」

威勢のいい声と共にドアノブを回し押し開く。光が差し込み景色が様々な色に染まっっていく。

虫食いにあった木々の葉や、水やりを終えた花壇の花々。それぞれ個々の色彩が綺麗に彩られていった。

目の前の通学路を自転車も幾台も通り過ぎていく。空には薄く雲が広がり、青空を水色に染める。

「おはよー」

いつもの声が聞こえる。

遠くから手を振りながら走ってくる女性は愛。

常に元気であるかの様子を思わせる愛は、スカートを一ひらりと風

に舞わせながら鞆を左手に提げている。女の子らしい小さなマスコットの人形を幾つか付けている点以外は特に装飾のない質素な革の鞆。

「おはよ」

はにかんで微笑む。母に似た天使の笑顔。

「今日もご機嫌だね」

えへへと笑う愛をよそに、凧咲はちやくちやくと歩を進めていく。ゆっくりとした調子で歩く凧咲に追い付いた愛は、お決まりの文句で挨拶を交わす。

「ちよつと待つてよー」

「どうしたの？」

今更になつて足を止め、きよとんとした顔で愛を見る。

「いや、ゴメン。もう待たなくていいや」

目を棒にして凧咲の愛想もない意地悪を流した。

フツツと柔らかかに笑い、風が髪を緩やかに靡かせる。ふんわりと甘い香水の香りが漂い、空気の波がそれを運んでいく。

「ごめんごめん」

依然笑つた調子で足を並べる。

「いいよ。いつもの事だし」

乱れた髪を直しつつ、凧咲の歩調に合わせて歩いた。

凧咲より少し小柄な愛は、歩幅の違いから少し競歩気味になっている。

「もう慣れたよ、凧ちゃん得意地悪には」

表情を少し歪めて呆れたように溜息を吐く。

「いつもの帰り道の仕返しだよ。これでもまだ足りないくらいだけ」

口元は悪魔のようにニヤリと微笑を浮かべ、細めた横目で愛を見つめた。

右手に提げた鞆を左手に持ち替えて、同調で歩いていく。

いつもの時間、いつもの平穩。ただ一つ違うのは、休日であるに

も関わらず学校へ向かっているという事。

三日後に迫った清淀祭<sup>せいてんさい</sup>。御上高校の生徒はそれに催し物を出す事を決められていた。

クラス単位で出される催しは毎年好評で、その商業利益は学級費或いは部費、はたまた学校の運営費に貢献していた。

その為、生徒たちの熱意は凄<sup>すご</sup>い。我こそが一番とあらゆる思考を展開し、そこに自分たちの頂点を見るのだった。

御上高校の校門が見える頃には、道の中心を街路樹である染井吉野が立ち並ぶ。学生たちの通学路である大通りを半分に分ける。

その木陰から漏れる木漏れ日と輝く緑葉が幻想的な景色を作りだし、凧咲の瞳を奪っていく。

「おっはよーっ」

その声が大きく響くと同時に、後ろから凧咲の脇を二本の腕がかい潜り、双丘を握りしめた。

「ひゃわっ」

驚きと恥ずかしさが声になって響き渡る。

双丘は単に触れるといった程度ではなく、パン生地を捏るようにグイグイと揉まれる。

「ちよっ、亜利栖<sup>ありす</sup>やめっ……あっ」

腕は制服の中に侵入し、横腹の辺りでうごめいた。

「はい、亜利栖そこでストップ。凧咲が皆の前で晒し物になっちゃってるから止めてあげないと凧ちゃん泣いちゃうよ?」

二本の腕はピクリと動きを止め、当事者は紅潮し、瞼にうっすら帯びた滴が浮かぶ標的の顔を覗き込む。

滲み出した涙が瞳に溜まりうるうると煌めいた。

「じっ……めんなさいっ」

向き直りつつ零れた涙を拭う凧咲に、亜利栖の腰が曲がる。

「亜利栖さー。そろそろその凧ちゃんを見つけると意識を飛ばして襲い掛かる癖治した方がいいよ?」

あたふたとした少女は表情を激変させ、凧咲に襲い掛かった時とは別人のように幼い顔を愛に向けた。

愛は呆れたように溜息を吐き、宥めるように口を開いた。

「亜利栖はさ、凧ちゃんが好きなんだよね」

少女は零れた涙をもともせず、コクリと首を縦に振る。

「でもさ、その変癪治さないとこつ毎日胸を扱かれてる凧ちゃんは皆に醜態を晒しちゃうし、それが原因で亜利栖の事嫌いになっちゃうかもだよ」

亜利栖は瞳に涙を溜めて今にも零れ落ちそうなほどに目元を潤わせる。

「でも、でも……」

凧咲、愛、凧咲と何度も表情を伺うように反復する少女の顔。黒く真っ直ぐ伸びた髪は凧咲にそっくりで、外見だけは入学当初の凧咲そっくりだと周囲から仄めかされている。それも、亜利栖が凧咲を好くあまりに真似てしまっているのが原因である。

凧咲や愛たちより二つ下の亜利栖は一目で凧咲に惚れ、凧咲を真似る事を始め、当事の凧咲はそれを光栄に思い、また妹が出来たみたいだと喜んだのだが、亜利栖の好意は異常でその好意はエスカレートしていった。

その結果が、凧咲を見つけると意識が飛び、凧咲に襲い掛かってしまうという変癪を生み出したのである。

ツインテールの巻髪と幼過ぎる童顔が、まるで人形を思わせる亜利栖。表情を変えたり、涙を流したりさえしなければそれこそ高価な人形と間違われて持ち去られそうな程である。

「大丈夫、だよ亜利栖」

微かに治まった紅潮に羞恥を感じながらも微笑んで話す凧咲。

乱れた服を直しつつ、亜利栖を真正面に捉えて手を握る。

俯いた少女はハツと顔を上げて、憧れの女性を見つめる。

「ご……めんなさい」

「ちよつとビツクリしただけだから、もう大丈夫……あつそうだ」

ギュツと握った手を開いて、掌に髪留めを乗せた。

「亜利栖、誕生日おめでと」

満面の笑みで亜利栖に微笑みかけ、それを受けた亜利栖の涙顔は驚愕に変わり、驚愕は歓喜に変わった。

「えっ？ えっ？」

先程と同様に凧咲と愛の顔を何度も繰り返して往復する。

「あ……でも、えっ？」

何が起こってるのか分からない風に相変わらずきよとんとした顔がクリクリと瞳を動かす。

「たんじょーび」

「誕生日」

二人は大きく息を吸った。

「おめでとうっ」

二人は大きく息を吐いた。

溜まりに溜まった涙が、ダムによってせき止められていた貯水の放水のように急激に溢れ出す。

「凧、咲さまーっ」

震えた声で大きく声を上げ、両の腕を広げて飛び付いた。

凧咲はそれを大切な人形でも受けるように受け止める。

「これからも、これからもっ」

抱きしめた腕を凧咲の肩に添えて、ピンと伸ばして距離をとる。

「凧咲様が大好きです」

全く凧咲以外が見えていない亜利栖は、自分の想いを率直に叫んだ。

凧咲は多少たじろいだが、治まりかけていた紅潮を再び露にして微笑んだ。

「ありがとう。でもごめんね？」

「え？」

何度目だろうか、きよとんとした顔が凧咲を見つめる。

「昨日、愛から聞いたばかりで誕生日にこんな物しかあげられなく

て」

首を思い切り横に振って凧咲の言葉を切り捨てる。

「凧咲様の物だから、だから嬉しいの」

少女の瞳は真剣そのもの。先程までの幼い様子は何処へやら、今の亜利栖の眼は鋭く強い。

「憧れの凧咲様が使ってた物だから……」

凧咲は亜利栖の握る髪留めを手に取り、目に掛かった髪を花の金具で装飾された髪留めで左掛けに留めた。

「ワアッ」と周囲から歓声上がり、腕を組んで愛は頷く。凧咲はニコツと笑って小さく「いつもありがと」と呟いた。

「似合ってるよ」

凧咲の言葉を最後に亜利栖はその場で崩れ落ち、わんわんと泣き叫んだ。

その場の朗らかな雰囲気に見取れ、喜劇にもらい泣きし、足を止めた生徒たちが予鈴のチャイムが鳴り終わった後だという事に気付くのはこの三分後の話。

校門が閉まっていた。

案の定遅刻した生徒たちは一人ひとり校門の横にある小門から校内に入る。

見るからに体育会系を連想させる強靱な肢体の男性教師と相反する華奢な女性教師。

「はい次っ」

一人ずつ学年と組、出席番号を述べて女性教師の手にしたカルテに記帳される。

「2年4組9番」

このカルテは全生徒の出席を確認した後に御上校ホストコンピュータに入力され、出席状況を徹底管理される。

「諏訪くんね？」

「はい」

「最近遅刻気味だから気をつけなさいね。はい次っ」

勿論そのカルテの中には”如月風咲””笠音愛””絵沼亜利栖”の三人の名前もあった。

「如月かづきのねさんに笠音かたねさん、それに絵沼えぬまさん。貴方たちはまた揃いも揃って……」

悪態を吐きながら、三人のクラスや出席番号を聞くまでもなくカルテにチェックを入れた。

「貴方たち成績は良いのだけど、こつも遅刻ばかりしてると校内選考から外されるわよ」

呆れた風を装い、そのまま手でシツシツと払い次の生徒の情報をカルテに記入していく。

「気をつけまーす」

愛が反省していないような態度で適当に言葉を吐き捨てると、そくさと自分のクラスに向かって歩き出した。

亜利栖と別れ、風咲と愛は教室へと向かう。

「ったくあの眼鏡」

「眼鏡なんて言ったら細川先生が可哀相だよ」

愛の言葉を受けた風咲は微笑しながら言葉を返す。

廊下には生徒は一人もいない代わりに、教師とは何度もすれ違つ。その度に挨拶をしなければいけないのを愛は苦痛に感じていた。

「おはようございます」

「お早う」

クールビズ。教師たちの着る服は薄手の生地になっており、至るところに風合いを良くする工夫が見られる。

また一人、教師が胸を張って歩いて来た。

「おはようございます」

「おっ」

手を上げて気付いたという事を合図し、そのまま通り過ぎた。

まともな挨拶を返さない教師に苛立ちのようなうやむやを抱いたまま、二人は自らの教室をひっそりと覗き込み様子を窺った。

「如月、笠音」

ポンと両生徒の右肩と左肩に手を置き、声をかける教師がいた。

「お前らはまた遅刻か？ 最近多いぞ」

男は乗せた手を退かせて廊下の端に視線を向け、真逆の方にも視線を変えた。

「例の如月に纏わり付く生徒が原因なら、その子の担任に言っただけで済ませようか……」

「結構です。彼女は関係ありませんから」

胸の前で掌を前に向けた右手を小さく左右に揺らす。

紛らわすように微笑んで、首を右に傾けた。

「そうか……しかし、気を付けろよ。笠音はともかく如月は当校始まって以来の」

「迷惑です」

教師の言葉を制して大きく口にした。

先程までの揚々とした調子を微塵も感じさせない鋭い瞳。

教師という地位に立つ人間を完全に否定するような醜悪の塊。

「貴方たち教師は成績だけにしか関心を持ってないのですか？」

教師は動揺し、たじろぐ。

コホンと咳ばらいをして体勢を立て直し、仄咲に眼を合わせないように視線をそらした。

「ま、まあ、教師という立場上はだな……お前たち生徒を安全に、より優秀な進学或いは就職に……」

「では窺います」

教師のおどおどとした言葉は簡単に遮られる。

「久保田先生一個人としては、私たち二人をどう思ってますか？」  
沈黙が流れる。

異変に気付いた生徒は担任に気付かれないように窓からその顛末を見守り、友達へと情報を回していく。

「先生は……だな、お前たち二人にはより良い進学をと……」  
「偽善ですね」

思いもよらない言葉が紡がれる。

「それに答えがおかしい」

徹底した重圧。

凧咲は教師を見下した。

「私は進学するつもりですが愛は就職です。間違えないで下さい。それに……」

教師の血の気がひく。

怖気のような何かが教師を煽った。

「私は久保田先生のいう良い学校などに行くつもりは毛頭ありません」

男性教師の株価が大暴落した。

「教師という立場に立つ事で自らに自惚れ、自分の力量をも弁え<sup>わかま</sup>ず、成績の良い生徒のみを抜粋して成績の優秀な進学先へと送り出す」

もはや教師に言葉はない。

ただひたすらと一人の生徒の言葉に耳を傾けた。

「楽な道だけが選ばれて、それ以外は放棄。そのどころが、どの行動が教師たる行動か?」

力を増した言葉は廊下中に響き渡る。

教室の至る窓から生徒が顔を出し、扉を開いて各々のクラスの担任が覗き込んだ。

「べ、別に放棄など……」

「ではどうして、空を助けなかったのですか?」

重く低い声。

「あの時、救いの手を差し延べていたら空は疑われる事はなかったのかもしれない」

ひよっこりと出ていた顔が俯く。

「罪だけを抱いていなくなかったのかもしれない」

空気は重く苦しく、悲哀の表情で蔓延する。

「あいつは、私の言葉に耳を傾けなかったではないか」

「それで諦めるのですか?」

痛い耳を抑えるように生徒たちは窓をゆっくりと閉めた。

「たった一度聞き入れなかっただけで……」  
頬を滴が伝った。

「私は貴方たち大人を許しはしない」

「凧ちゃん……」

涙が零れた。

凧咲は体の向きを変えると、元来た道へと歩き始める。

「凧ちゃんっ」

言葉は虚しく廊下に響いた。

教師はホツと息を吐き、かと思うと悪態を吐く。

「あんな奴に引つ付いてるから毒牙に曝されるんだよ」

愛の瞳が尖る。

「風守空か……フン、あれほど腐った人間がこの世に存在する事が信じら……」

「パンツ」と空気を裂く音が大きく広がった。

愛の右手は孤を描いて振り抜かれた。

「卑怯者っ」

そう捨て置いて凧咲の後を追った。

残ったのは堕ちた教師と心地の悪い空気だった。

街は静かだった。

車の通りは少なく、歩いている人もいない。

延々と蝉が鳴き、暑苦しさがだけが街を覆っていた。

(公園でも行くかな……)

御上公園。昨日、愛が凧咲をからかった公園。ブランコを思いきり蹴って飛んだ。

植樹された木々が悠然と立ち並び、向日葵が太陽に向かう。

「ようっ」

男の声が飛ぶ。同時に漕いでいたブランコから飛び降り、綺麗に着地した。

「藤崎くん……?」

凧咲は公園に入る一歩手前で足を止めた。

「どうしたの? 学校は?」

「それを言うなら凧咲もだろ?」

不適に笑う男は凧咲と同じクラスの生徒。

愛の彼氏であり、そのチャラチャラした装いはいつもの控え目な性格を感じさせない。

「私は……」

「久保田」

「えっ」

「シメといた」

言葉を理解できず首を傾げる。

藤崎悠志は青い老朽化したベンチに腰を掛けた。

「凧咲……俺と付き合え、悪いようにはしない」

あまりに唐突で、紡がれる事自体有り得ない言葉。

驚き、呆れ、男を見つめる。

「冗談よして」

「冗談なもんか……」

凧咲は男の一言一言に憤りを感じ始める。

「愛は?」

「アイツは凧咲に近づく為の口実だ」

考えるよりも早く言葉が飛び出る。

「ふざけないで」

「ふざけてなどいない」

掛けていたベンチから徐に立ち上がった。

「……本気?」

「そう言っている」

手を伸ばせば届く距離。二人はじつと互いを睨み合う。

「俺は昔から凧咲に目はつけていた」

ポケットに突っ込んだ両手を抜いて、左手を腰に添える。

「だが、あの時の俺にはお前を守るだけの力はなかった」

「今はあるっていうの？」

「当然だ」

体の向きを変えて左掌を空に向けて広げる。薄白い緑の靄がブワツと掌から漏れた。

そのまま左腕を右から左へと薙ぎ払った。

濃緑の炎が広がり、その先にあった向日葵を灰にする。

「これが”力”だ」

悠志からの不意な告白とは違った、しかしそれよりも大きな衝動が凧咲の体を駆け巡った。

「俺と共に来い……こんな詰まらない世界とはおさらばさせてやる」  
目の前で起こった事象がトリックなのか本物の”力”なのか、そんな事はどうでも良かった。

目前に求めていた世界がある。

「凧咲……」

悠志の手が凧咲の顎を捉える。

風が凧咲の髪を揺らし、木々を揺らし、緑炎を揺らした。

顔に掛かった髪を分け、もう片方の手をそつと添え、勢いのままに唇を重ねた。

凧咲の双掌が男を突き飛ばす。

軽い身のこなしで崩れた体勢を整えた。

「つとと。意外に力強いね」

「それは……何？」

依然、靄を帯びた掌が事の不気味さを伝える。

握った花は燃え上がり、灰となって崩れ落ちる。

「コレか？」

「ボツ」と音を立てて火柱が上がった。

「お前が着いてくると答えれば、教えてやらない事もない」

「これは取引じゃない」

身を翻して公園をあとにする。

燃える景色を背景に、ゆっくりと足を運ぶ。

「お前が断れば、お前じゃない誰かが不幸な目に遭う」

ピタツと足が止まり、鋭い視線が悠志を刺す。

「そんな事したら許さない」

「なら、従えばいい」

男は笑った。

怒気のような異様な憤慨が凧咲を満たす。

「それに俺は許されなくてもお前を連れていく。あっちの世界を知れば、俺に感謝して従いたくもなるさ」

ニヒルな笑顔が凧咲の視線をくぎづけにした。

その視線は、怒りと羨ましさのような不穏を語る。

「私には空がいる」

悠志の表情が曇った。

「風守空……悪魔の王か」

凧咲の眉間に皺が寄り、潜めるように目を細くする。

「藤崎くんまでそんな事言うんだ」

「あいつの素性を知れば嫌でもそう思うさ」

凧咲は悠志の言葉が指す意味を探るが疑問は更に深まり、更に知ろうとすればうやむやに掻き消された。

今度は悠志が背を向けて右腕を適当に上げて後ろ手に手を振った。

「3日後の午後6時に此処でもう一度だけ聞く。それまでに心を決めっておけ」

横顔から覗く瞳は常に余裕が満ち溢れており、紡ぎ出す言葉は全てが上手くいくかのような不信感を抱かせる。

「理性のままに生きる」

そう言っつて男はいなくなつた。

揺らめく緑炎は鎮火し、変わりに黒炭が公園に広がっていた。

蝉は依然と鳴き喚き、悲しみの予兆を匂わせていた。

ACT・1 青天霹靂（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

今後の展開に少しでも興味を抱いて下さったのであれば、是非、次作もよろしく願います。

「ACT・2 諸行無常」でお会い出来ることを楽しみにしています。

## ACT・2 諸行無常（前書き）

どうも

再び足を運んで下さって有難う御座います。

始めに、一つ忠告としてお知らせ致します。

当小説のタイトル

「Neutral」

は、実は仮のタイトルであって今後変更する可能性があるということです。

新しいタイトルに変わった時は、新しい作品だと足を運んで「何だタイトル変えただけか」と見事に騙されて下さい（笑）

とまあ、こんな調子でこれからも書き続けていきますので、よろしくお願いします。

ACT・2 諸行無常

深淵の闇に潜った  
他に行く道がなくて  
それしか出来なくて

深淵の闇を潜った  
喜びが薄れるほどに  
息苦しくなるほどに

深淵の闇を潜った  
その先に光を望んだ  
新たな道を望んだ

Milshelic Ainia

崩れた日常。それを望んでいたのかもしれない。  
移ろい行く世界に、何を求めていたのだろう。などと複雑に絡み  
合う思念に耽る。

「三日後……」

藤崎の見せた人知を越えた”力”。

掌に緑炎をほとばしらせ、向日葵を焼き払った。

現代科学に於いてあれほど純粹で濃淡の深い緑を帯びた炎は存在  
しない。仮に存在したとして、それを人の身だけで発生させるなど  
不可能だった。

「あつちの世界……」

藤崎が言った。此処じゃない何処かで、恐らく風咲の非凡な願  
いが溢れた世界。

藤崎の繰り出した緑炎のような俗に魔法と呼ばれるに値する”力が飛び交うであろう世界。”

「本当にそんな世界が……」

実際に見せつけられて尚、その現実離れた世界を不信に思う。

人間は、身に降り懸かった異常の粛正を無理にでも行い、社会の秩序に則ろうとする。今の風咲は正にそれだった。

「藤崎くんと一緒じゃないと行けないのかな……？」

考えてみればそう。藤崎はどうやってあの力を手に入れたのか、どうやって異次元の世界に行ったのか、どうして藤崎が手に入れたのか。

考えれば考える程に不可解な部分が増えていく。

(そろそろ寝よう)

三日。あと三日しかない平凡な日常で見つけなければいけない異世界への足掛かり。何か手掛かりがあれば着いていく必要などないしかし

《お前じゃない誰かが不幸な目に遭う》

この言葉が胸に刺さって風咲の身体を拘束し、いざ動かんとする時に限って身近な人々の顔が過ぎって足止めを食らわしていた。

誰しもが自由で自らの選んだ道を行く為に、自分自身が犠牲になればいいのかもしれないなどと消極的な構えで藤崎の脅迫に応じようとまで考えていた。

真っ直ぐな光が闇を引き裂いた瞬間、そこに景色が開かれた。

横一閃に薙ぎ払われた一筋の光を境に真逆の風景が映し出された。

真っ黒な木々。真っ黒な沼。真っ黒な地面。

真っ白な木々。真っ白な沼。真っ白な地面。

対象的な景色の背景に色彩が色付き始めた時、パツと満面の光が景色を埋めて次の瞬間にはばやけた自分の部屋が映し出された。

(夢……?)

ベッドから身体を起こして薄地の布団を手にとって畳む少女。

「夢か」

寝間着のまま階段を下り洗面所に入り、窓から外を眺める。ぼんやりとした光がゆっくりと確かな輪郭で街中を照らし出していた。家には誰もいない。凧咲の両親は仕事で外出している。

「後二日」

昨日の衝撃を一身に受け、今でもその余韻がギシギシと身体中を震わせる。

両手に掬った水道水を思いきり顔にぶちまけて、ぼやっとした感覚を吹き飛ばした。

タオルで顔を拭き、部屋に戻ってジャージに着替える。

（公園に行ってみよう）

昨日の傷跡。公園のソレを見れば現実味が湧き、藤崎や異世界への手掛かりも見つけられる可能性があった。

道路を歩く凧咲の傍を小鳥の囀りが行進曲となって響いてくる。

静かであって弱々しい包容力がささやかな陽気を運ぶ。

（どうしてこんなに平穩なんだろう）

昨日目にした景色とのギャップが、昨日の異様さを物語る。

まだ完全に明けきっていない為か、人通りはない。車が数台通り過ぎるだけでごく自然な早朝を楽しんでいた。

少し走ればすぐに御上公園に着いた。凧咲の家と御上公園は最短距離を結べば大した距離はない。

燃えかすとなった向日葵、黒炭の絨毯。それを期待して公園に広がる眺望へと目を移した。

「えっ」

そこに存在する筈の灰は、太陽に向かう向日葵と、砂地や煉瓦敷きの地面に置き換えられている。

向日葵に触れて触感を確かめる。青い香りとざらついた感触がその存在を主張した。

「どうして？」

昨日の出来事が否定される。そんな感覚が凧咲を襲った。

何もかもが修繕され、何もかもが昨日という時間をなかったものにしようとする。

それで良かったのかもしれない。やっと掴んだマンネリ化した世界からの”脱出路”は、凧咲の希望を水泡に帰させるように現実をしらしめる。

（藤崎くんに会おう）

昨日の出来事が嘘であるかのような景色を前に、凧咲は緑炎を点した少年の姿を目に浮かべた。

早足で帰路を辿り、家に着いた途端に荷物を鞆に詰める。

風呂場で衣服を脱ぎ、蛇口を全開にして叩きつけるようなシャワーを浴びた。それから自分の髪を掌で弄ぶ。

水道水と変わらない水温で身体中に浴び、冷たさに快感を覚える。

（こんなのじゃない）

目を瞑って顔全面に雨を降らせる。

真っ黒の世界に映るのは不気味なまでにはつきりとした緑炎。濃淡までもが輪郭を強調する。

（私の夢がそこにあるのなら）

流れ落ちる水を掌に溜め、そのまま両手を閉じて指の隙間から零れる水を見つめた。

蛇口を捻る。シャワーを止めて扉を開く。

タオルを手にとって手早く水を拭き取った。

（確かめないといけない）

藤崎悠志の事。異世界の事。不可思議な力の事……。

私が理性のままに生きるチャンスはこれっきりかもしれない。ただそう思い込んで、否定された時の絶望感など微塵も感じていなかった。

必ずソレは存在すると思いつく。いつの間にかそう信じて止まない凧咲がそこにいた。

（始まるのかもしれない）

今まで生きてきた移り変わりの緩い日常ではなく、全てが新鮮で  
激動が走る日常。

(いや、既に始まっているのかもしれない)

どうしても素直に生きられなかった自分を戒めて、両の拳を握り  
締める。

(昨日の出来事を境に私は変わる。変わったんだ)

周りばかりを気にして自分の事は二の次。他人の幸せばかりを見  
つめていた風咲。

それは風咲の好意であったのだが、それでもそこに自分を見出だ  
していなかった。

(分かってた。自分の思いが偽善であった事なんて)

ホームルーム時の教室前で罵声を浴びせた景色が鮮明に映し出さ  
れる。綺麗ごとばかりを吐かす教師に自分を重ねていた。

偽善に満ちた自分を鏡映しに見るように、それは風咲自身への叱  
責だった。

腐ってなんかいられない。その思いが風咲の意志を固くして、自  
らの道を見出ださせた。

(私は”生きたい”んだ)

遙か高みに希望を抱き、胸に手をあてて決心した。

封の開いていない袋から食パンを取り出して電子レンジに入れる。  
少し焦げ目がつくようにいつもより長めに設定した。

温まったフライパンに油を引き、溶いた卵を零し入れる。ジュウ  
という音と共に卵は凝固し始めた。

調味料を適量振りかけ、ある程度固まったのを確認し、フライで  
返したところでレンジが焼き上がりの声を上げ、香ばしい香りを漂  
わせた。

綺麗な格子状の焦げ目のついた食パンを取り出して、同じく焼き  
上がった卵と予め水洗いしていたレタスを乗せて食パンを半分に置  
み、即席のサンドイッチが完成する。

牛乳をコップに注ぎ、テレビの前にある小さなガラス机に置いた。小皿に乗せたサンドイッチも同様に小さな机に置き、リモコンを手にとってテレビをつけた。

いつものチャンネルでいつものニュース番組が流れる。

また今日も殺人事件やら頼りない政治家たちの報道が流れている。「幸い火事になったのは空き家で」

火事という言葉に反応するのは緑炎の所為か、それとも単なる好奇心か、考えるまでもなく思考を遮る。画面を眺めながらサンドイッチに思い切り噛り付いた。

液晶画面には燃え尽きた廃家が映り、その周囲の景色を映ししていた。

最後の一口を口に放り込む、飲み干して空になったコップと皿を手にとって流し台に運んだ。

自分の部屋に戻る。女の子らしいと言えば女の子らしい整頓の行き届いた部屋。

ハンガーにかけたブレザーを手にとって身を包み、支度の終えた鞆を背負った。

鏡で容姿の最終チェックを済ませて階段を降りる。トントントンと軽快な音を立てて弾んだ。

《呟きは自分だけの道を行きなさい》

靴を履いてドアノブに手をかけた瞬間、不意に母親の言葉が甦った。

「向かう先が幻でも良いよね」

想いを込めた言葉を微かに音にしてノブを回した。

光が隙間から溢れる。

その先が夢見た世界であるかのような錯覚と微かな風が流れ込んだ。

ぼんやりと、しかし直ぐにはつきりとした視界に男性が浮かんだ。「よっ」

左右の手を制服のポケットに突っ込み、右肩から腰の左側に向け

て提げた鞆。

コンクリートの壁にもたれ掛かって凧咲を見ていた。鋭い視線が凧咲を刺す。

「藤崎くん……」

瞬間、全ての思いが吹っ切れていた。現実という名の檻に悩み、迷い、惑わされていた。

その檻が崩れ去った事に気付いていた。

「愛はいいの？」

「言つたる？ あいつはただの布石」

もたれ掛けていた壁から離れ、ゆっくりとにじり寄る悠志。

「まあしかした、俺も鬼じゃない。この世界とおさらばするまでは愛とも仲良くするさ」

嘘なのか本気で言っているのかと、相手の目を見て詮索をかけるかどうか悩む。ただそこに真意があるのか、それだけが気掛かりになっていた。

「ただ、愛は今日体調を崩してるみたいでおばさんから凧咲によるしくだつて」

頷いて藤崎の横顔を見る凧咲。前に向き直って再び横の顔を見た。

「何だ？」

そわそわとする様子を見兼ねてか、藤崎から言葉をかける。

「あつと、その……」

俯いて考える。率直か回り道か、本題への道を探る。

「お前そんなだつたか？」

しばしの沈黙。相手の出方を見て応じるか、それとも自ら切り出すか。その境を右往左往していた。

「俺は何でもてきばきとそつなく熟すお前が好きなんだがな」

「五月蠅いわね、あつちの世界だとか藤崎くんの力だとか、そういう事についてどうやって聞こうか考えてたのに」

声が喉をついて出た。

大きな溜め息を吐くと同時に、何でもない焦燥感が消えていく。

悩んでいた事が阿呆らしくなって途端に回りくどさが邪魔になった。  
藤崎が笑う。プツと吹き出すように。

「それならそうと言えよ」

昨日の事を考えて、藤崎が口にする前に釘をさす。

「取引はしないわよ」

「はいはい」

簡単に流される。周りを歩く通行人はおらず、我が物顔で前を歩  
く藤崎に追い付くように早足で歩いた。

「あつちの世界とかそんな名前が正式名称じゃない事ぐらい分かる  
よな」

風咲の肯定を前提に話を進める。ゆっくりと語調を整え、言葉を  
整理しながら喋っていく。

「まずは庭園エデンだな」

”まず”という言葉に疑いをかけるが、構わずに耳を傾ける風咲。  
恐らく後に続く内容を考慮し、簡易的な図柄をイメージとして浮か  
べた。

「”力”を持つ者、これを宝礼ジニアと呼ぶが、このジニアを初めに誘う  
世界とでも言えればいいか」

横文字を浮かべ、新たな構図が頭に浮かぶ。

「この力を”JIN”と言って、星霊と呼ばれる守護霊的な存在だ  
と思えばいい」

漫画や小説、アニメ等でよく目にする主人公や主要人物の傍らに  
付く精霊の姿を浮かべて、ソレに高揚感を抱いた。

「そしてジニアは完全中立の立場から、二つの勢力に別れる。暫く  
はそのまま中立でいる事も出来るらしいがな」

二つの勢力。興味を抱く世界が現実味を増して押し寄せる。言葉  
に出来ない嬉しさのような歓喜が、じわじわと風咲の頭の中で蔓延  
し始めた。

「その勢力の内の一つを聖界ユートピア。今いるこの世界でいう天国がそのま

ま形を成した世界」

白翼をはためかせた天使が脳内を駆け巡る。一面を色取り取りの華々が埋め尽くした。

「もう一つを魔界<sup>デイズトピア</sup>。言わずとも予想は出来るだろうが、地獄のような風貌を持つらしい」

荒廃した大地に暗雲の敷き詰められた暗黒の世界。血の沼なんかも想像した。

架空の世界として挙げられていた世界が、身近に感じられる事を不思議に感じていた。

有り得ない事が形を成して、少しずつ形成されていく。

描いていた世界よりも更に仮想的な世界が、風咲を取り巻いていく。

いつの間にかマンネリからの脱出路ばかりが目の前に広がり、自分から歩み出している事にも気付かないまま仮想へと足を踏み出していた。

くるりと身体を横に返すと、道に沿って歩き始める。

「俺はユートピア、神々の下で相棒<sup>パートナー</sup>を探してる途中だ」

「パートナー？」

足並みを揃えて藤崎に並ぶ。ゆったりと歩いているにも関わらずやはり男性、身長が高いのもあるが少しの歩幅の違いが、少しずつの遅れを作る。

「ああ。三つの世界を総称して”鏡界(アニメ=アニメス)”って呼ぶんだが、そのアニメでは二人一組を基本として動くんだ」

競歩気味に歩いて、言葉を聞き漏らさないようにピッタリ歩いた。理由は簡単。一人が武器、もう一人が使い手となって戦うためと互いに作業を分担するため」

その双方を分類する為、武器となる者を従臣<sup>クォーツ</sup>、使い手を主帝と呼ぶ。

「そのパートナーに私を？」

「そういう事だ」

間髪いれない即答。それ以外に答えはないとでも言うように、言葉の口にした瞬間返していた。

「でもさ、それって私じゃないといけない訳？ 愛の方があっさり着いていきそうな気がするんだけど」

溜め息を吐く。この藤崎の呆れ顔を見るのは何度目だろうかとも呆れる。少し考えを広くもてば直ぐに辿り着く答えがあるのにも関わらず、目先だけの新鮮で刺激的な何かが風咲の思考能力を低下させていた。

「お前基礎的な事には頭回るのに、こういうのには疎いな」

もう一度溜め息。自分との会話での癖になっっているのか、それとも自分の言葉が溜め息を吐かせているのか、と思いつつ悩む。

「確かにパートナーは愛でも誰でもいい、が、そういう問題じゃない」

頭の上にクエスチョンマークを掲げるように首を傾けて疑問の表情を浮かべた。

「言つたる？ 俺はお前が好きなんだ」

「私は嫌いよ」

「手痛いな」

ハハツと余裕を見せる笑いには次の言葉を探す表情が表れる。

「ただ、単純に好意だけで風咲を選んでる訳じゃない」

藤崎が並べる言葉は核心の手前で遮られ、次に紡がれるであろうキーワードを前に相手の興味を引き付ける。

「そう、愛じゃ器が足りないんだ」

「器？」

一問一答が繰り返され、徐々に疑問が消えていくのを実感する風咲。

偽善で出来ていた自分の器などただの飾り。それならば、愛のおらかな器の方が大きいなどと思慮を巡らせる。

「そう器だ。人間的な器の大きさとは違う、潜在的な”力”を容れる器」

既に数分と歩いているにも関わらず、人ひとり見かけない。

「そして、ある程度の質、大きさをもった器でなければアニメへの進行は認められない」

器は通行証代わり。そういう意味合いでもとれる。

「そして風咲はその適性をもっている……俺以上にな」  
胸の高鳴りを感じた。

心の臓の奥から、手足の末端まで熱くなってくるのを感じる。

風咲には世界を渡る術がある。その術は緑炎を操る藤崎よりも適性では上。私を誘うための話術だとしても疑わなかった。

「だから俺は風咲を選んだ。本能がそうさせたのかもしれない」  
「だから着いて来いと？」

抑え切れない感情が、夕闇に狂気の景色に空を見た時と彷彿する。禍々しかつた恐怖が、歓喜を帯びて風咲を取り巻く。

夕闇に紛れた空の影はは、既に鏡界に誘われていたのだと、直感のような何か風咲にそう思わせていた。

自らに宿る”器”が藤崎のそれよりも優れているという話ににやける。

藤崎が風咲の顔を覗き込んで何かを口にしようとした瞬間、慌てるように周りを見渡して叫ぶように風咲の名前を呼んだ。

「風咲っ」

しなやかで華奢な腕を掴まれ、ギュッと強く引つ張られる。

「な……」

ひたすら引つ張って走る藤崎に着いて足を運び、事の次第に思慮を配る。

「何？」

「もう来やがった」

「えっ、何？」

ボンと音を立てて火花が散る。見ている風咲を不思議な気分させる深緑の炎。藤崎の胸元で燈された炎は、微かな弧を描いて数メートル飛んだ所で弾けた。

「魔界の使者だ。お前を狙ってる」

「何で？」

急展開の出来事に頭が混乱する。見えない何かから逃げ、ただひたすらに走っている。

「お前が聖界へと連れて行かれると踏んだんだろっ」

とんでもない誤解だと訂正を求めようとするが、その相手がいない。

「私が藤崎くんに着いていくって？」

確かめるように聞き返すと、藤崎は間髪いれずに返事する。

「そういう事だ」

さっきまでの鼓動とは違う恐れによる緊張感が尻咲の胸を打つ。走って走って走って、血の脈動と恐怖に胸が鳴った。

「私は聖界になんか……」

恐れから逃げるように言葉が喉を突いて飛び出した。

「じゃあ、魔界側に付くのか？」

言葉を遮って話す言葉は、少しばかり怒気を帯びている。ゆらゆら揺られ走る中で荒くなっていく呼吸を感じる。

「こんなのが聖界とか魔界ならどっちにも……」

「魔界は甘くないぞ。即断即決が奴らのやり方だ」

唇を噛み締めて真っ直ぐに前を向く藤崎の顔を見つめて考える。

聖界と魔界。どちらも畏怖を帯びて尻咲を恐怖の淵へと追いやり、次第に逃げ道を狭めていった。

「奴らは今此処で尻咲を殺すか、魔界側に引き込むかしか考えていない」

恐怖心が波となって押し寄せる。俯いていた顔を上げると視線の先に校門が見えた。

「過度な期待はするなよ」

(学校に逃げ込めば……)

思うより先に藤崎の言葉が希望を蔑ろにする。儂く抱いた光も脆く、瞬く間にその明かりを消失させる。

「魔界の使者だ、公施設程度で足を止めるとは思えん」

藤崎の言葉を耳にして尚、逃げ切れる気がしていた。それだけ自分が地球ジョーという環境に慣れて、平和で閑散とした感覚に埋もれてしまっている事に凧咲は気付いていない。

「例え奴がJINを使つて暴れたとしても、庭園エーデンの奴らが修復に来て直ぐに元通りだ」

途端、公園の景色を思い出した。燃え尽きた向日葵が元通りに修復され、黒ずんだ地面は綺麗さっぱり元の姿を取り戻していた。

「一か八かだ……」

身体が上へと押し上げられる感覚。腕を引かれて体勢を崩すと、スツと掬い上げるように膝裏に腕が回った。

「なっ、な……」

顔に熱が帯びる。俗にお姫様抱つことと呼ばれる姿勢で抱き上げられると、凧咲は何が何か分からぬまま心の底で小さいながらも安堵していた。

「しがみつけど」

景色が流れる。木々が、家が、標識が形を崩して線になる。

猛烈な加速の中、爆発するようにさえ感じる心臓が、それこそ大太鼓を思いきり弾いた時のように大きく鼓動する。

魔界の使者としか分からない何かが凧咲を追って来ている。その不安や恐怖を抱いたまま、藤崎は勢いを殺さず全力で校内に走り込んだ。

## A C T ・ 2 諸行無常（後書き）

御一読有難う御座いました。

今回初めて一人称で描写したのですが、難しいですね（汗  
私にはどうやら三人称の方が合っているようです。

これからも一人称と三人称を使い分けながら掲載していきますが、  
視点の移り変わりに注意して頂けるようお願いします。  
では「A C T ・ 3 四苦八苦」でお会いしましょう。

## ACT・3 四苦八苦（前書き）

### 第3章：四苦八苦へようこそ

今章のサブタイトルとなっている四苦八苦ですが、やっぱり人間と  
いうのは思い悩んで生きていくものなんだなーと今更に実感しまし  
た（汗

悩みという要素は、キャラクターを作り上げる上で重要な点の一つ  
だと思っています。

しかし、作り込んだキャラは愛着をもってしまつて中々に手放せな  
いという……（笑

そして、作者として愛着を捨て、一人の人として扱う技能が、作品  
をよりよいものにしていくのだと……難しいものです。

さて、遅くなりましたが「ACT・3 四苦八苦」をお楽しみ下さ  
い

ACT・3 四苦八苦

貴方の成績を皆が羨ましがった。  
すると貴方は次のテストで0点を取った。

貴方の絵画を皆が見つめた。  
すると貴方は絵画にペンキをぶちまけた。

貴方の歌声を皆が慕った。  
すると貴方は歌うのを止めてしまった。

Milshelic Ainia

(振り切れた……?)

凧咲は藤崎の腕の中、索<sup>シート</sup>と呼ばれる宝礼<sup>シニア</sup>特有のセンサーには特定の波長は感じない。

(諦めた? いや、まさか……)

鼻を鳴らして凧咲を地面に降ろす。少女は砂埃のついたスカートを叩き、乱れた髪をかき揚げた。

「説明してよね」

「ああ」

簡単に返事をして、周りの気配を探る。藤崎も索<sup>シート</sup>を展開して相手を探した。

「どうやら巻けたようだ」

首を少し横に傾けて、心配そうな顔を向ける凧咲。

「こんな所で話すのも何だ、教室に行こう」

不穏さを残した表情は、黙って首を縦に振った。これほど朝早くに登校している生徒もいないだろうと踏んで同意した。

案の定教室は鍵がかかったままで生徒どころか教職員の姿さえも疎ら。職員室で教室の鍵を借り、教室の扉を開いた。籠った空気かもわっと押し出される。

窓を扉を全開にして、熱気を帯びた空気を逃がした。

藤崎は適当な席に鞆を放り、机に座る。凧咲は自分の席の椅子に座った。

「そんなに気になるのか？」

正面に座る凧咲は真剣な面持ちで藤崎を見つめている。

こちらばかりへらへらとふざけてもいられないと態度を改め、藤崎は相對して話を始めた。

「お前は聖界にも魔界にも所属する気はないのか？」

鋭い眼差しで藤崎を見つめ、言葉の代わりに首肯で応える。それを見て残念そうにため息混じりで「そうか」と呟くと、凧咲は付け足すように言葉を繕う。

「でも、それは今だから。何も知らないもの、そう簡単に決めるなんて出来ないよ」

もう一度「そうか」と紡いだ言葉は弱く、瞼を閉じながら吐き出す吐息は微かなながらも悲しみの余韻を残していた。

頷いて見上げる凧咲。吹き抜ける風が風合いの良い夏服の制服を通り、緊張と歓喜でかいた汗を冷やして心地よい感覚が凧咲の五感を刺激する。

「なら、庭園エデンか」

更に重苦しいため息が藤崎の口から吐き出され、まるで悪態を吐いているかのような装いが凧咲の不安を生む。

「庭園は大きな商業都市だ」

「何？」

「情報が行き交い、商品と金が行き交い、様々な宝礼が行き交う世界」

情報を欲する凧咲には丁度いい世界だと早合点し、その意味する所を汲まない。

「分かるか？　そこに生きる術が商工業に通じるものであるならば、それらに関する知識と技術が入り用な上、それはこの地球とは理が違う」

風が吹き抜ける。風咲の髪を揺らして去った風はそのまま窓の外へと飛び出した。

「俺も初めは選びたかつたさ……」

藤崎のため息の意味を知り、同情のような感覚が流れ込む。

「庭園で生きる術を持ってさえいれば、導いてくれる奴さえいれば、自分が選んだ道に自分を投じられたのに……」

無知の藤崎もまた未知の世界へと放り出され、無防備なまま庭園を放浪し、その果てに餓死寸前の所を聖界の住人によって救われた。

苦しみから解放された瞬間、藤崎は自分を助けた聖界に加わる事を選んだ。

「って事はさ、藤崎くんも最初は中立を選んだの？　それとどうやって鏡界に？」

藤崎は天井を仰いでから首を左右に振った。遠くを呆けるように眺めて口を開く。

「俺は放り出されたんだ」

身震いするような悪夢を浮かべて、今更にその景色に耽る。夕闇に浮かんだ黒い手が藤崎の胸倉を掴んで引きずり込んだ。そのまま空間の歪みへと連れ込み、気付いた頃には世界は藤崎を否定した。

暗がりに見えた一つの人影。暗さのあまりに表情や容姿を確認出来ず、咄嗟の事象に混乱が生じた。

「何者なのか分からない。腕に刻まれた文字以外は何も……」

俺の視界は奪われていた。それが意図的なものかどうかも分からないまま気絶させられた。

「気がつけば見知らぬ世界。分かるか？　アニマの事も何もかもを知らない俺が、いきなり馬鹿げたような世界に連れ出されたんだ」  
真剣に藤崎を射していた視線は机に落ち、考え込むように俯いて

いる。

「着いて来い風咲。お前の不自由にはさせない。お前を殺したくないんだ」

ハツと顔を上げる。その仕草も鏡界の話が訪れてからは見慣れていた。

「着いて来ないなら殺せつて？ 脅迫なんて結構温厚じゃないのね」

一瞬ビクッと身体を震わせたが、直ぐに表情を変えて的確な応えが返した。

「でも、それじゃ魔界と何ら変わりないじゃない」

もつともな返事を返して、後に紡がれる藤崎の言葉を待ち受ける。

「そうでもないさ。奴ら魔界の住人は無闇やたらと刈り取るだけだが、聖界は違う」

当人を見た藤崎が誇らしげに言う様は、自分がそこに所属している事に満足しているように感じさせる。

「彼らは利益にならない事はしない」

一拍程の感覚を踏んで風咲が言葉を返す。

「報酬思考なのね」

常の風咲に戻った瞬間だった。滑舌が良くなり、はきはきと言葉を並べていく。

「私は私のやりたい事をやる。天使様だろうが神様だろうが、そんなのは関係ない」

正面から見下ろすようにして座る藤崎と視線を合わせ、急に立ち上がった。

「それでもいいなら着いて行くわ」

「それはあの方々が決める事」

ふんと鼻を鳴らしてため息を返し、自分の上に立つ者に対して忠誠を誓う藤崎の瞳を覗く。

「話を通してはくれないの？」

「こんな下っ端が神様方に意を述べるなんて無理な話だ」

自らの立場を弁えて、一言一言に敬語を添える藤崎の姿は、まさ

に聖界に所属した人物像を描いていた。

風がバツと一齐に吹き込む。凧咲の長い髪をこれでもかというほど暴れさせ、乱しに乱して吹き抜ける。

「風が変わった」

凧咲が窓越しに外を見て言った。

索<sup>シート</sup>困を閉じた魔界の使者が、開いた窓から二人を眺めている。

「な……に」

凧咲の目が大きく見開いた。窓には蜥<sup>とかげ</sup>蜴のような緑色体の生物が黒い軽装に身を包んで屈んでいる。

「如月凧咲という娘はお前か？」

蜥蜴と凧咲の間に立って、浅葱<sup>プラム</sup>炎を掌に集中させる藤崎。

「構えるな、兵号Z303E藤崎悠志」

顔をしかめて蜥蜴を睨み付ける藤崎。その形相は鈍く、焦りと恐れが絡み合う。

「何故、ディストピアの者が俺の名を？」

燈したプラムを掻き消して、凧咲を後ろに下がらせた。手を横に

差し出して、凧咲を守るように添える。

「兵号F216C暮<sup>くれは</sup>羽。熾<sup>セラフイム</sup>天使様の命を受け、如月凧咲を我が主らの物とする」

(熾……天使だと?)

驚いていた。ただの人間が天使に誘いを受けるなどと言う話は聞いたことがなかった。藤崎自身が宝礼となって長くはないが、それでも天使に誘われた人間を見た事がなかった。

更には目の前にいる暮羽という蜥蜴が立ち塞がっている事が何より藤崎の立場をまずくした。

「しかし、暮羽様。彼女は私の……」

つぶらな瞳の奥に眠る殺気が藤崎の身体を貫く。

「貴様ごとき弱兵に、この者を扱える訳もあるまい。身の程を知れ」  
スツと暮羽の腕が伸び、バチツという音と共に一瞬にして空気が

変化した。

「これほどの逸材の所在を知っておりながら、上への通達をせず我が物としようと思論んだ罪、ユートピアの騎士として身をもって受けよ」

視界を紫電が走った。刹那の迅雷。避ける余裕などなく一瞬の出来事が過ぎていた。藤崎が気がついた時には保健室のベッドで横になっており、泣きそうな顔の愛が横から見つめ、仕舞いには泣いていた。

(愛、お前は どうして そんな顔で俺を見つめる?)

「藤崎くん……」

藤崎がその表情を望むのは風咲。その想いが喉をついて出る。

「……風、咲」

無意識に瞼を閉じた藤崎は、気を失うようにして再び寢床に沈んだ。

御上市を一望する。

街を縦に割る御上川を御上大橋が渡る。

橋を一直線に伸ばした東側に住宅街が広がり、西には商店街が広がっていた。

茶、灰、赤褐色などのタイルが道を作り、真っ直ぐに住宅街を突き抜ける。

「二日後、熾天使様のもとへお前を連れていく」

泣きじゃくる風咲。藤崎の時と同様に背中と膝裏に腕を通し、空を駆る蜥蜴の暮羽。

「小娘風情が色号など信じられんが、これは我らが真神の決定」  
覆る事のない主の言葉に、溜め息を吐いて腕の中の少女を見つめた。

「小娘よ、何故に泣く。二日後には人のみならず、我らが天兵を凌駕する地位と力を手にするのだぞ?」

目の前の現実を受け入れようとせず、こんな事になるのならと今

更に後悔する少女。

「我らからすれば羨ましい限りなのだがな……」

暮羽は黙って風咲を抱き、遙かな空を駆った。

目の前で連れ去られる風咲を前に何も出来なかった事を悔やむ。

「くそっ」

少年は思いきり壁を叩いた。

「どうすればいい」

猶予は二日を切る。目を閉じて眠りに落ちていた間にも刻一刻と時間は過ぎていた。

何をしてでもパートナーとして風咲を迎えるつもりだった少年は、既に手の届かない所にいる風咲と自分の失態を嘆く。

それらは全て、計画が水泡に帰した事を言わずもがなに伝える。

「風咲、お前は俺を求めてはくれないのか」

万に一つでも可能性があるのならと、結果の見た勝負に希望を抱く。

「F級、暮羽」

油断していたとはいえ、ただの一撃で撃沈した自分を不甲斐なく感じ、それでいて捨て切れない風咲への執着心。

どんな手を使ってでも、勝たなければならぬ。取り戻す。それだけを胸に己の主君を脳裏に浮かべた。

「差し違えても奪い返す」

理性のままに。幾度と聞かされた鏡界が鏡界であるために必要な個々の心構え。

その想いを胸に刻み直して、何処にいても知らない標的へと矛先を向けた。

「浅葱なる火焰。俺の欲望で燃えてくれ」

主君の意を信念に壁に叩きつけた拳の隙間から、深い緑が立ち上がった。

学校を飛び出した。特にあてもなく街中を走り回る藤崎悠志。

空の雲が何気なく浮かんで流されるように、藤崎の足も自然と体を運んでいた。

( 凧咲、凧咲っ )

心の底で誰かが叫んでいるような気さえしていた。

「どこにいる？」

凧咲がいなければ始まらない、始まらない世界が藤崎を駆り立てる。

( 全てはお前で始まるんだ )

かつて孤独ひどろだった少年を浮かべ、そこに灯る光が神々しく輝く。

( あの時のように…… )

水平線に沈む太陽を見下げるように、天高くから満ち月が浮かんでいた。そこにぼんやりと射す光はいつでも少年の傍にいた。

( お前が俺らの光なんだ )

目の前の景色が開ける。その先に一点、笠音愛の姿を認めた。

「どうして？」

愛の怒気を帯びた声に足を止める藤崎。

「凧ちゃんには風守くんがいるんでしょ？」

愛が罵声を浴びせる対象に目を凝らす。愛の言葉からそこにいる人物を特定する。当然のようにそこにいる凧咲は、俯いて愛の言葉に怯えていた。

「私の藤崎くん返してよ」

沈黙と叫び声を取り巻くように、商店街を歩く人々が並ぶ。

ひそひそとした声で口々に言葉をばらまく人々は、蔑むように二人を見つめ、根も葉も無い言葉が飛び出る口を隠す。

「愛っ」

取り巻きをくぐり抜けて、自分を見つめる二人の間に入ると、愛と向き合っつて両の腕を掴んだ。

「藤崎くん」

淋しそうな愛の声。

「愛、俺は……」

言葉に戸惑う藤崎の言葉。

「藤崎くん」

その二人を割るように後ろから声が飛び、俯いた風咲の声が弱く響く。

「風咲、大丈夫なのか？」

目の前にいる愛より風咲を心配する。愛はそれを黙って睨みつけていた。

「大丈夫って、何がかな？」

「あの暮羽とかいう奴に捕まってそれから……」

話の内容を掴めない愛は顔をしかめて二人の会話に耳を傾けた。

「まさか、解放されたのか？」

「藤崎くんはさつきから、何を言ってるのかな？」

風咲は顔を上げて首を傾げる。

「私はお別れを伝えに来たんだよ？」

「なっ……」

いきなり過ぎる風咲の言葉に、言葉を失う。

「やっぱり、私も藤崎くんみたいな弱兵じゃなくて、暮羽さんに命令したセラフイムさんの方がいいかなって思うの」

表情は柔らかく、笑みを浮かべて口を動かす。

周りを取り巻く通行人は騒然とし始めた。

「だから愛を大切にしておいて、ねっ」

翻して背を向けた。右腕をあげる。風が風咲の髪を揺らした。

「バイバイ」

寂しそうな背中が、右手を左右に振りながらゆっくりと視界から消えていった。

「風……風？」

愛が藤崎の制服をグイッと掴んだ。

「藤崎くん、私を見て」

愛の声が響き渡る。聞こえる音の全てが雑音にしか聞こえない藤崎は、風咲の去った商店街の向こうを見つめていた。

「二股かしら？」

「最近の若い子はやるわねー」

「さっきの子泣いてたわよ」

たまたま通り掛かっただけの主婦たちが、何も知らないで三人の関係を根拠もなく茶化す。

鬱陶しい。藤崎の心情はそれだけだった。

「黙れ……」

依然、主婦たちの愚弄は続いている。誰もそれを止めようとはせず、耳に留まった言葉だけで次々と話の輪を広げていった。

「黙れよっ」

我慢の限界だった。自分が話の中心に立っている事すら忘れて、気付いた時には叫んでいた。後には引けないという想いが、藤崎に声を上げさせた。

「お前らただの凡人が、風咲の事をとやかく言う筋合いはねえんだよ」

制服を掴んだ手を振りほどく。愛は驚きと哀しみの表情を混沌とさせ、どうすればいいのか分からずに立ち尽くす。

「人の気持ちも知らないで、蔑む事しか出来ない」

周りの人間を、目前で目を見開いた愛さえを見下して、何の迷いもなく言い放った。

「風咲は俺の全てなんだっ」

途端に愛の膝は折れ、カクンと沈んで地面に手を着いた。

雨が降る。見るからに重苦しい暗雲が空を埋めていた。

大きな告白を後に、愛を置いて御上公園の入口に立つ。風咲の世界が変わった場所。

降りしきる雨のせいか、人影一つない。

びしょ濡れになった服を気にする事なく、二席あるブランコの内の一つに座った。

雨霧が視界を遮り、沈んだ街の風貌さえ見せようとしない。ずぶ濡れの頭を抱えて眼を瞑り、俯いて自らの弱さを恨んだ。

( 凧咲が俺を必要としない )

それならば俺は何をすればいい。頭の中で木霊する想い。求めてくれるのならば全てを賭けてそれに応えようと胸に決めていた。

それでも凧咲は藤崎を求めず、その存在理由をなくしてしまった。  
( どうすればいい……？ )

藤崎は暫くそのまままで雨に打たれ、気付いた時には完全に日が沈んでいた。

雨は止み、シンと耳鳴りするような静けさが広がっている。

折角手に入れた異能力は想いを前には役に立たず、そこで何もできない自らの無力さを嘆いた。

覚束ない足どりで家に帰り、濡れた服のまま真っ直ぐにベッドに向かう。倒れるように横になった。

「 どうすればいいんだよ…… 」

天井に己が主を浮かべると、目眩のような急な眠気が全身の自由を奪い、知らぬ間に瞼が落ちていた。

全てを照らし出すかのような眩しい光が、一面の景色に宿る。

ぼんやりとぼやけ、はつきりと分からない周景が、じんわりと溶けるように色彩が混ざり合う。

次第に鮮やかだった色調が質素なモノクロへと姿を変え、やがて光を失って闇に呑まれた。

ポツンと一点。宙に浮いているのか、平面に描かれているのかさえ分からない一つの小さな点を、何故か無性に手にしたいという気持ちで、藤崎の腕を思い切り伸ばした。

サツと光が窓から差し込み、起床を促してくる。

「 凧咲っ 」

悪い夢でも見ていた人が、急に目を覚ますような勢いで起き上がり、途端にとてつもない脱力感が身体を襲う。

びしょびしょに濡れていた服は幾分か湿気を失っており、代わりに服と密着していたベッドのシーツが人型に湿っていた。

代わりの制服を手にとって洗面所に向かい、濡れた制服を剥ぎ取ってタオルで全身を拭き、先程手にした代えの制服に着替えて鏡を見た。

目を細くした力ない姿が映し出されている。

髪がべったりと引っ付いていたり、所々で跳ねている。

うなだれるような様子で鏡越しにこちらを睨み付ける虚像。

「クソッ」

思い切り拳を鏡に叩きつけた。考えなしに叩いた鏡には亀裂が入り、破片が飛び散っては細かい欠片が拳を傷付ける。

漏れだした浅葱炎<sup>ブルーム</sup>が拳を覆い、刺さった破片を溶かした。

息苦しさ、むせ返るような空気が肺を圧迫する。台所のソファーに寝転び安静にしていると、次第に呼吸も安定した。

「ピンポン」と軽快な音程でベーシックな呼び鈴が鳴り響く。

ゆっくりと身体を起こして扉の覗き窓から相手を確認して扉を開いた。

「何だ？」

怒気の籠った声で相手を見る。一瞬たじろいだ愛が、上目使いで恐る恐る藤崎の表情を窺っていた。

「学校……行かないの？」

「何の為に？」

何を暢気にと思った藤崎の口からは自然と荒げた声が出ていた。

愛を周りを飛び交う蠅のような鬱陶しい何かに感じて、全く関係のないにも関わらずに罵声を上げる。

分かっていた。自分の無力が導いた運命なのだと。

「……すまない、一人にしてくれ」

それでもやる瀬ない気持ちだが、藤崎の顔を愛の視線から背けさせる。

「私は藤崎くんと一緒にいたい」

扉を閉めようとノブに手をかけた所で、愛の張った声が響き渡る。背の低い小柄な愛が、はつきりとした目つきで藤崎を見つめていた。「藤崎くんが何処かに行くっていうんなら、私も絶対に着いてく」鬱陶しい。そうとしか考えていなかった自分が見返り、途端にフツという溜め息混じりの呆れのような安堵が藤崎を包んだ。

「ちょっと待つてる」

扉を開けっ放しにして部屋に戻る。

(愛も同じなんだ……)

自分となんら変わらない、藤崎自身が呬咲に抱いている”一緒にいたい”という気持ち、愛の中にもある事を嬉しく思った。

「祝炎<sup>フラム</sup>」

机に置いた指輪を手に取り、左の中指に嵌めた。

「行かれるのですか我が主よ」

「ああ、蜥蜴狩りの始まりだな」

おしとやかな調子を思わせるゆったりとした声の相棒と一言だけ言葉を交わして、家を飛び出した。

「待たせたな」

目一杯首を振る愛。ペットののような愛らしさが伝わってくる。

(俺が呬咲を必要とするように、愛も俺を必要としている)

ゆっくりと愛の歩調を気にしながら、鞆も持たずに通学路を歩き始めた。

さんさんと降り注ぐ太陽の日差し。昨日の暗雲はどこに消えたのかと思うほど満天の青空が広がり、空には雲一つなく街中が照らし出されていた。

「愛……」

目を合わせないように真っ直ぐ前に視線を送る藤崎。

ちらりと横目に覗くと、案の定、愛は藤崎の横顔を窺って不思議そうな顔をしていた。

「お前は俺についてくると言った」

うんうんと頷いて必死な視線が藤崎を見つめる。

「だが、俺は風咲を追う」

愛はびくつと体を小さく揺らして視線を落とした。叱られた子どものようにしょんぼりとした装い。

「それでもお前も来るのか？」

落とした視線が返り、何かを訴えようと愛の瞳が藤崎の目を捕らえる。

「俺が風咲を追ったとしても、お前は俺を求めるのか？」

「私は……」

忙しく表情を変え、視線をうろつろさせて戸惑いを感じさせる。自らを求めない人に着いていく事がどれだけ無意味で無様な事が、考えただけでも手を引くべきだという答えが浮かび上がる。

「お前が求めるのなら」

落とした視線をもう一度藤崎に向けた。

「俺もそれに応えよう」

表情が変わる。喜びといった簡単なものではなく、戸惑いのような感情が見え隠れてしていた。

刹那の時を長く長く感じさせる。愛は胸に込み上げてくる想いに押し流されんと必死に堪え、鳴り響く心臓の鼓動を落ち着けるように言葉を紡ぐ。

「着いて行きます、どこまでも」

立ち止まって腰の前で両手で鞆を持つ。ピンと綺麗な姿勢で貫くような真剣な眼差しを送る愛。

「藤崎くんが風咲を追うように、私も藤崎くんを……」

「ありがとう」

愛の言葉を遮って、素直に礼を告げた。嬉しい気持ちか喉をついて出た。藤崎は前を向いて一步を踏み出す。それに連れて愛も一步踏み出した。

ゆっくりと並行して歩いていく。互いに嬉しさや有り難さから来る気持ちを十分に胸で噛み締めて、ゆっくりとゆっくりと歩いて行

く。

暫く歩くと突然に横道から凧咲が飛び出してきた。凧咲の通学路とは掛け離れた道順。それに気付いても敢えて口にせず、事の成り行きを見守る藤崎。

「あ、おはよ。ごめん用事あるから先行くね」

そう言つて直ぐさま走り去つた。

昨日の事など何でもなかったかの様子で意気揚々とした姿が、藤崎が目論んでいる事を拒んでくる。

「凧咲、怒つてるのかな？」

愛は眉をへの字に曲げた心配そうな面持ちで、凧咲の走り去つた跡を見つめていた。

「凧咲はそんな小さな人間じゃない。心配するな、俺が保証する」  
苦笑いのような微笑みが、チラツと藤崎を覗いた。

「私の好敵手ライバル的な位置にいる凧咲の良い所を保証されてもね」

溜め息を吐いて鞆を持ち替えた。久しくさえ感じる藤崎との日常的な会話を心底から楽しむ。

「藤崎くんは凧咲のどういう所が好きなの？」

全く考える間もなく何かを思い出しているかのように答える。

「強さ……だな」

それから二人はゆっくりと歩きながら、学校に着くまで会話を楽しんだ。

道程の途中で亜利栖と合流し、愛と二人で凧咲の話をしていた。

亜利栖は本当に人形じゃないのかと疑うほどに顔立ちが整つており、見る度に初めて顔を会わした時の事を思い出す藤崎。

両者ただ呆然と棒立ち状態のまま睨めっこ。終いには亜利栖がニコツと笑い、それに釣られて藤崎も笑顔を浮かべていた。

人形のような愛らしい見た目とは裏腹に、芯の強い亜利栖は藤崎と同様に凧咲を慕つた。

「愛が藤崎に投げた」凧咲の何処が好きか”といった問いにも、同

じ様に強さと答えていた。

学校に着いて亜利栖と別れ、愛と藤崎は教室に向かう。

教室に人影は少なく、清淀祭に出す催し物の準備を任された各委員の一部と、体育倶楽部の若干名が朝早くから登校していた。

「よっ、今日は早いな。手伝いに来てくれたのか？」

「まさか、そんな訳ないだろ」

「だろうな」

いつものように悪意混じりの挨拶を交わす。

「如月来てないか？」

「いや、まだ見てないな」

辺りを見渡し、それを確認する。

登校している生徒の殆どは男子で、数えるほどしかいない女子は看板の飾り付けや色付けなどの細かい作業にあたっていた。

「おかしいな、先に来てた筈なのに」

「如月が？」

そう言ったかと思うと応えた生徒が周りの生徒に聞き取りを始める。

如月風咲は御上高校に於いて六割以上の生徒が知るといふ有名人あつという間にその所在が掴めた。

「如月さんなら職員室で久保田先生と話してたよ」

藤崎たちとは面識もない別のクラスの生徒が窓越しに言った。

「何か用なのか？」

教室内で藤崎と初めに言葉を交わした雅人が疑問を込めて聞く。

黙々と作業をしていた生徒たちも腕を止めて藤崎を見つめた。

「用という程のもんじゃないさ。ちよつと風咲の様子がいつもと違つたから……」

一昨日の事、昨日の事。考えれば分からなくもないが、わざわざ不安がらせることもないと踏んで言葉を曖昧にする。

鏡界（アニメ・アニメス）の話をしたところで、祝<sup>プラム</sup>災の見えない人間<sup>ヒト</sup>に信じられるわけがなかったからである。

「気にするな、たぶん俺の勘違いだ」

ハハツと笑ってみせる藤崎の制服の裾を愛が引つ張った。

視線は藤崎を見つめて無言で外を指差す。窓から外を覗き見ると、そこには凧咲の姿があった。

「何してんだ？」

同じ様に覗き込んだ雅人が作業片手に言った。

「走ってる……のか？」

グラウンドを颯爽と駆け回る姿が凧と映えていた。長い髪を長い鉢巻きで纏めてポニーテールにしている。

「あいつ陸上部だったか？」

馬鹿な男子たちが見たままの景色に口を揃える。呆れた女子が男子たちの間違いを訂正した。

「如月さんは踊り部でしょ」

御上高校の部活は幅広い。その中でも踊り部はこの一年で大きく形を変えた。

正式にはダンス部と呼ばれ、ストリートやブレイクダンスを始め、ジャズやヒップホップ、果ては舞踊などで構成されている。

凧咲が一年の時の踊り部による舞台演技はまさに圧巻で、従来の文化祭を大きく上回る盛り上がりを見せた。

凧咲はそれが理由で有名人となり得、それ以来様々な面で教職員からも一目置かれている。

「凧咲、どうかしたのかな？」

凧咲を見つめたままの藤崎に、同じ様に凧咲を見つめたままの愛が言う。

二人はただ呆然と凧咲を見つめ、軽快に走り回る様子と今朝の言葉との差異を感じていた。

広がる眺望を呆けて眺め、いつの間にか鳴り終わったチャイムに気付いた時には凧咲の姿はグラウンドにはなかった。

「席に着けー。出席を取るぞ」

藤崎たちの担任である久保田誠一がネクタイをきちっと絞めて確

認しながら入って来る。

出席簿を広げて辺りを見渡し、席に着いた生徒を数えていく。いつもと変わらない平穏な時間。

あの日、あの時、あの手に誘われた時からずっとずれていた藤崎の時間。ゆつたりとして、それでいて肩にのしかかるものもない平穏な世界。

藤崎が今をそう思うのも緊張に縛られた身体が解放されたがっていただけだった。

「えー、皆に誠に残念な報せがある」

風咲のいない教室に久保田の重苦しい声が不穏な予兆を響かせる。日常的な会話で盛り上がるはずのクラスの興奮はサッと鎮まった。

扉を開いて風咲が体操着のまま息を荒くして入って来た。頭には鉢巻きを巻いたままで汗に塗れた体操服が肌に引っ付いて艶かしい身体のラインを際立たせた。

汗だくの表情に涼しい顔を浮かべる。

「本日をもって」

出来過ぎたシチュエーションが藤崎の想いを掻き立てる。久保田の口を塞ぎたかった藤崎は、金縛りの恐れに身体を縛り付けられて動けなかった。

立つ事も出来ず、口を開く事も出来ず、ただ呆然と眺められるだけの景色を怨んだ。

「如月は御上高校を退学します」

藤崎は何も出来ずにガタンと椅子を引く音を聞いた。

### ACT・3 四苦八苦（後書き）

第三章完読ありがとうございます。

此処で一つお詫び申し上げます（汗

先日、二章における一部のページが重複し、皆様にはご迷惑をおかけしました。

そこなのですが、この場を借りてお願いしたいことがあります。

作品を読んでいる時に、「これは間違いでは？」と思う部分を見つけたら、メッセージや評価機能を利用して、ご通達願えないでしょうか？

お手数をおかけすることは重々承知していますし、そのような事にならないようにも気をつけます。

もし、「これは？」と思う部分がありましたら連絡お願いします。

（普通の感想も大歓迎。作者の更新意欲が湧きますw）

それでは

「ACT・4 明鏡止水」

でお会いしましょう

Good bye（\*^ ^\*）/

## ACT・4 明鏡止水（前書き）

ようこそ「ACT・4 明鏡止水」へ

皆様もお気づきだと思いますが、サブタイトルが全て四文字熟語であることをお知らせしますw

毎回、その章の雰囲気に合わせて四文字熟語を探すのは中々に難しい事ですが、実は結構楽しく選ばせてもらっています。

今章のように「明鏡止水」とありますが、この語に作者のどのような意味が込められているかを察して頂ければ幸いです

では、「ACT・4 明鏡止水」をお楽しみ下さい

## ACT・4 明鏡止水

悪魔と天使がいたとして、あなたはどちらを信じるのかしら。  
フフフツ、簡単な事よね。  
そう、とても簡単な事よ。  
別に誰を信じるだなんて強制的なものじゃないわ。  
信じたくなければ信じなければいいの。  
そう、この私の言葉さえもね。

M i l s h e l c    A i n i a

一人の少女が立ち上がり、罵声を浴びせるように大声を上げる。

「風咲、どうしてっ？」

瞳にはうつすらと涙が滲み、眉間に皺を寄せている。

「もう決めたから」

啞然とした生徒を前にスタスタと足を風咲の元に運び、怒気を帯びた眼差しで正面から睨みつけた。

「逃げるの？」

風咲は悲しげな顔をして愛を見つめた。

「違うわ。こうするしかないんだもの」

どうしていいのかわからない教師が呆然と成り行きを見守る。

「こうしないと……」

瞳に溜めた涙を零して、ガクツと崩れ落ちた。

教師はサツと手を差し延べて泣き崩れた少女に対応する。

「何があつたのか我々教師は何もしらん」

教師は風咲の背後に回って身体を支える。

「今朝、教室に乗り込んで来たかと思つたら理由も何も告げずいきなり学校辞めます、だ」

体勢を立て直しながら深い溜め息を吐く。

「それで、たったそれだけで風咲の退学を認めたの？」  
愛の対象が教師に向けられる。

蒸し暑い教室は静まり返り、愛の声だけが木霊していた。

「またそうやって、止めもせず空くんの時のようにっ」

蝉が鳴き叫ぶ中、「パンッ」と空気が裂ける音がはっきりと響いた。

赤くなつた頬を押さえるのは愛。一同は驚きのあまり言葉が出ない。

「空は私とは違う。私なんかとは……」

愛も言葉を失った。

「笠音、お前たちの間に何があつたかは知らん」

教師が真面目な顔で語り始めた。

静まり返つた教室は、僅かな蒸し暑苦しささえ感じさせない。

「だがな、本気になつた人間を前に、その想いを棄てると言つのは些か無理な話だと思わんか？」

風咲の瞳が愛の瞳を捉えた。あまりに真つ直ぐに見つめる瞳を前に、愛は自然とのけ反つた。

顔向きを変えて、藤崎の方を見る。

「藤崎くん、言つたよね？ 理性のままに生きろって」

「ああ」

うつすらと憤りを感じながら少女を睨み付けた。

「だから……」

「これが答えだと？」

ゆっくりと深く頷いた。

重苦しい空気は締め切つた教室に蔓延し、言葉を口にする事を許さないかのように、一堂に会した人間の口を封じた。

「分かつた……」

そう言つて見つめてくる少女の瞳を見つめ返す。

「最後に一つだけいいか？」

力強い視線は相手の瞳を逃さない。ましてや引き付けている。空気を讀んだかのように蝉たちの合唱は一斉に鎮まった。

「どうしてお前は泣いている？」

愛の頬をひっぱたいてからずっと、凧咲の瞳から涙が零れ続けていた。

「嘘……」

思わず頬に流れた涙を拭った。手についた涙を見て驚く。

「どうしたのかな？ ゴミでも入ったかな？」

ハハツと小さく笑って瞼を擦る。充血した瞳がそっと覗いた。

椅子を引く音が響く。しかし、そこには誰も居らず、そこにいる筈の少年は教壇の横に立つ凧咲の左腕を掴んでいた。

「えっ」

教室が騒然とする。

あまりにも速過ぎる藤崎の移動に戸惑い、驚嘆だけが喉をついた。「行くんだな？」

「大丈夫だって、暮羽さんだっているんだし、危ない旅になんてならないよ」

急に明るくなって言葉を口にしたかと思うと、次の瞬間には驚く程に影がさす。

沈んだ表情は話し掛け難い雰囲気醸し出していた。

「分かった」

少年はそう言って掴んだ腕を放し、教師に顔を向けた。

「俺も退学します」

「え……あつ、わっ私もです」

驚きに呂律が回らず、噛み噛みに言葉を並べた。

藤崎だけでなく愛までもが退学を申し出るなど、冗談にしか思っていない。

「何を……」

藤崎の瞳は真つ直ぐと突き刺さるように教師の眼を貫いて制した。  
「問題なんてない筈だ」

驚嘆の表情を浮かべるのは教師だけではない。風咲を含め、教室内の生徒は皆啞然としていた。

力強い瞳を前に屈服する教師。重苦しい溜め息を吐いた。自分の立場なども忘れ、意志の薄弱さにも泣き、三人の関係も分からず終いになる。

「分かった」

それでも三人の想いを尊重して喉をついた言葉を紡いだ。意思の強さに諦めた教師は配布用紙の中から一枚の紙を取り出すと、三人の前に提示した。

「退学届だ。これぐらい書いていけ」

そう言つて三人の名前を署名させると、奪い取るように紙を引き寄せる。

「貴様らは揃いも揃つて馬鹿ばかりだな……」

教室独特の臭いと清淀祭の準備に使う木材の臭い、汗と湿気の混ざり合った混沌とした異臭が締め切られた教室に充満し、蝉の歌声がより一層暑さを増させる。

「この学校には貴様らのような馬鹿はいらん。さつさと何処にでも行け」

手で犬でも追い払うようにサツと振る。

藤崎は教師の背後に言葉を送る。

「世話になつたな」

愛が続く。

「今までありがとうございました」

一テンポ遅れて風咲が続いた。

「亜利栖をよろしく願います。皆も今までありがとうね」

藤崎が教室から出る。愛と風咲はひよこつと頭を下げて廊下に出た。

あまりの唐突さに何一つ口に出来なかつた生徒と教師の間に重苦

しい空気が流れる。

次第に批判するような尖った瞳が教師を睨みつけていく。教師は呆れたように大きな溜め息を吐くと、三人に署名させた紙を生徒全員が見えるように満遍なく見せ付けた。

凧咲を先頭に三人でより一層大きく響く蝉の声を聞きながら廊下を歩く。

「藤崎くんはともかく愛まで辞める必要があるの？」  
俯いたまま悲しそうな素振りを見せる。

「私は藤崎くんに着いていくつて決めたから」  
「俺はお前の士になる。そう決めた」

びっくりして眼を見開いた凧咲が声を上げようとすると、背後から声が響いてきた。

「藤崎ー」

「如月さーん」

「笠音さんー」

周りのクラスなどお構いなしに大声で廊下に呼応した。

「いつでも戻って来いよ」

「待つてるから」

仕方なさそうに出てきた教師がドアにもたれ掛かって左手を軽く上げて左右に振る。

「帰ってきたらちゃんと説明してもらおうからな」

男女の声が入り交じり、風の吹き抜ける廊下に響き渡った。

「うん、帰ったらきつと……」

凧咲は涙でぐちゃぐちゃにした顔を上げて大きく口を開いて言った。

愛は大きく手を振って小さな涙の粒を流し、満面の笑みで別れを告げる。

藤崎は教師の右手に握られた用紙を見て鼻を鳴らした。

「貴様ら馬鹿にも歓迎してくれる場所はあるって事だ。気でも変わ

「つたら帰ってこい」

同じく鼻を鳴らす教師が握る紙には”休学届”の文字が大きく印刷されていた。

突風が砂埃を巻き上げる。

グランドに大きく刻まれた「行ってきます」の文字は、風に負ける事なく整然と三人の意思を語る。

「少しだけ安心した」

風に舞うのは砂埃だけにあらず、木々の葉や軽い布地、女性たちの長髪を揺らしていく。

「皆の前で大泣きして、叫んだりして」

長い髪を纏めた体操着の女性は、そこはかたく感じる焦燥感を覚えながらも視界に広がる景色を堪能する。

「でもやっぱり一番は一人じゃないってことかもしれない」

ラフな黒地のハーフパンツに掛かる首に掛けた長い鉢巻き。

普通に頭に巻くだけでは圧倒的に長すぎる赤いそれは、普段の授業ではまともに着けて来る生徒も居らず、教師も昔から存在する御上高校の歴史ある名残に終止符を打とうと会議に会議を重ねている。幸い今年度の体育祭を最後に漢気鉢巻きおとぎという通称を持った長鉢巻きは廃止される事が決定された。

「私は明日発つ」

点々と雲のかかった空を仰ぐ女性は、目の前で自分を見つめる男女を指差す。

「二人の気持ちも、意思の強さも分かった……でも、邪魔しないで」  
女性は肩に掛かった鉢巻きを何度か不規則な長さに折り畳んで握りしめた。

「お願いだから……」

思い切り力を込めて、小さく、それでいて力強く言った。

握られた鉢巻きと一緒に木々にたかる蝉たちが悲鳴を上げた。

「ああ」

(分かってるさ、お前が何の為に何を考えているかなんて……)

毛根から毛端まで綺麗な黒と茶色のグラデーションになった逆立った髪の毛をフワツと浮かせた男性。

「ロート 皇帝と呼ばれる”力持つ者”を表す呼称を得た男性は、優雅に舞う女性の髪に眼を奪われながら、ほのかに香るすつきりとした香水に泥酔した。」

「愛はまだだな」

しなやかな筋肉が制服からはみ出た上腕二頭筋に表れている。

「その内、お前にも資格が現れる。それまでこっちで待て」

何も知らない女性に、後で詳しく説明すると付け加えた。

「暮羽さんとの約束があるからそろそろ行くね」

凧咲は手を振って大きく距離をとった。

愛も同じように手を振って、姿が見えなくなるまで見送った。

「愛はどうして俺の後を追う？」

「知れたこと」

何故か普段とは違う喋り方をする愛。

「好きだからに決まってるじゃん」

次に言葉を口にした時にはいつもの口調に戻っていた。

「シンプルでいいな。俺もそう、凧咲が好きだ」

「うん、分かってる」

傍目にも混沌とした関係に思わせる会話を、清々しく交差させる。

そして凧咲は風守空を求めていた。

まったく信じられない事が起こるものと、常世の不思議な現象に歓心しつつも暮羽の待つ東山丘に向かう凧咲。

「早いな、いや遅かったと言うべきか？」

初対面の時とは全く違った人の容姿で丘に座り込んでいた。

「今日は人間型ヒューマノイドなんだ」

「ああ、アニマ・アニムスと同様の姿だとこの世界は混乱を招きかねんからな」

そう言って胸元から青いパッケージの箱を取り出すと、その箱の

中から煙草を一本取り出して口にくわえた。

スタンガンより少しばかり大人しい音が暮羽の手元で鳴ったかと思つと、ポツと音を立てて瞬間的に火が灯った。

「ふふっ」

暮羽は疑問を表情に浮かべた。

「アニマの姿で耽つてるのを思い浮かべちゃって……」

鼻を鳴らす暮羽が仕舞った箱をもう一度取り出す。

「お前も吸うか？」

首を小さく横に振った。

「私はいいよ、煙草とお酒はやらないの」

「そうか」

簡単に会話を交わすと、空を仰いで流れる雲を眺めた。

風に髪が靡き、言葉を運ぶ。

「あの男は納得したのか？」

低く重みのある渋い声で響いた。

煙草は既にフィルターの寸前まで灰になっている。

殆どが灰と化した煙草は、暮羽の手の中で火花を散らして風に散った。

「たぶん、駄目だと思う」

「やはりか……」

瞳に紫電を走らせて言った。

身体中をバチツという音と共に駆け巡る。

「俺は伝えた」

重い頭を持ち上げて、徐に首を縦に振った。

「分かつてる、でも……」

暮羽は腰を浮かせて立ち上がった。

風が吹くと共に丘に生える草木が薙ぎ、暮羽の一つに纏めた長髪が揺らぐ。

「俺は熾天使様に忠実だ。可能な限りお前の望みを叶えるとは言われている」

視線を風咲にやっつけて指をパチンと鳴らす。

途端に周囲の風が風咲を中心に巻いた。

「だがな、奴が交戦を求めてくるのであれば、俺もそれに応え、騎士の教えに従う」

鳴らした右手を左肩から思い切り右に薙ぐと、弾けるように風咲の足元の草が根本から跳ね上がった。

「如月風咲」

鳥の地鳴きが集まってくる。

周囲で木霊する鳴き声は次第に数を増やし、重なり合い、重く大きく響き渡る。

刹那、風咲を中心に空気の層が外側へと弾けた。

蛇行する草木の波。亀裂のような線で、風咲の足元から円を象って芝生が禿げた。

「お前を熾天使様に献上する。それが我が務め」

一瞬にして静まり返った丘に、暮羽の音が確かな音をもって流れた。

圧倒的な力が風咲の周りを支配する。藤崎の祝炎ブラムとは明らか格差を感じさせる。

一瞬にして空気が振動し、凍りつくようにして音を消した。

「クラス級の指す意味も戦を交えてみれば自ずと分かる」

トンネルに入った時や、飛行機の離着陸の時のように、気圧の変化に伴って耳を圧迫する感覚に見舞われる。

身体を熱と共に血液が駆け回った。

「結果は保証せんがな」

AからZまでのアルファベット26階級に分けられ、Aを兵号の最上級とする神の遣い。

後ろの数字は所属と個人の特性を表し、最語尾のアルファベットはそのクラスの熟練度を表す。

兵号Z303Eの藤崎悠志。兵号F216Cの暮羽くれはやひな数名。

兵号だけ見ても二人の実力の差は歴然だった。

「私が止めます。止めて見せます」

雲一つない空に烏が一羽飛んでいた。

東山丘は御上市の外れにある緑の豊かさが有名な緩やかな傾斜の丘である。

昔こそ落書きや悪戯が絶えない汚れた丘であったが、今日に至っては徹底された管理によって本来の姿を取り戻している。

「期待はしない」

「もしもの時は……」

禿げた地面を気にする事なく紡がれた言葉は、余韻の後に虚空に消えた。

藤崎悠志と笠音愛は、笠音家の愛の部屋で密談していた。

幸い家には二人しか居らず、密談といってもひそひそと喋るものではない。他の者に聞かれない程度のものだった。

「ここでいう器は人としての心の広さとか考え方のものではなく、生まれ持って所持している適性のようなもの」

愛は凧には及ばないものの、大した理解力を有している。

毎度と言っていていいほど、調査結果の学年順位は凧がトップ。愛がベスト5に入っている。

「それじゃ、私にはその器が足りないんだ」

「そういうこと」

愛は自分の胸を押さえた。

花柄の大きなタオルケットを敷いたベッドに腰をかけ、木製の板敷きの上に胡座あぐらをかく悠志を見る。

「どうやったら大きくなるのかな？」

悠志は困った顔をして俯いた。

「分からない……」

沈黙が似合わない明るい部屋に、静寂が訪れた。

暫くして悠志が口を開く。

「俺の時も、凧の場合もよく分からないんだ」

丸型電灯のほのかな光を浴びながら、沈んだ顔を愛に向けた。

「俺は自覚もないまま突然掠われて、凧咲は気付いた時には許容の器を遙かに凌駕する強大な器を抱いていた」

全ては何らかの現象がきっかけで起きているが、本人が自己でそれに気付くことはない。ユートピアにしるディストピアにしる、その地の支配者の命を受けて使者が参上し、目標を確実に連れ帰る。

そう告げようと悠志の口が開いた途端、愛がそれを遮って口を開いた。

「来たるべき時を以って、それは来たる……か」

聞き覚えのない言葉に悠志は顔をしかめ、難しそうな顔をする。

「昔ね、凧咲のお父さんが言ってたの」

絵本を読んでもらうのが待ち遠しい子どもの様に次の言葉を待ち侘びる。

「何かが起こるに際して、それは何かしらの強い意志を基に働く」

五月蠅くさえ感じていた蝉の鳴き声がぼやけて、愛の言葉が澄み切った水面に滴る雫のように凜と響いた。

「来たるべき時もまた然り。幾ら構えていようと来たるべき時が来ぬ限りはそれは来ぬってね」

高校に入ってそう日が経たない頃の夕暮れの中、赤く染まった堤防に座り込んだ凧咲の父が立ち尽くして夕日に黄昏れる二人に言い聞かせた。

当初の二人はそこに含まれた内容を容易に解釈し、本質的な偉大な意味を見逃していた。

「今になって分かった」

髪を弄っていた右手とベッドに沿っていた左手を頭の後ろに回して仰向けに倒れ、天井を仰いで凧咲を浮かべた。

「凧ちゃんが今」その時”で、私の”その時”はまだもう少し先なんだって」

悠志は意味深い言葉の数々に沈黙で応え、深慮の末に口を切った。それは悠然と紡がれる。

「愛……お前は死を覚悟するか？」

全く文脈の掴めない言葉に同様し、返す言葉に躊躇する。

「この世界くに生けるが術を必要とするか？」

身体を起こした愛の瞳を凝視する力強い視線。

愛の視界には悠志以外の世界がぼやけていた。

「お前が全てを棄てて、いかなる時も場合も俺の傍で俺を必要とするのであれば……」

高揚した悠志の衝動に駆り立てられ、愛の心臓が大きく鼓動する。扉を締め切って冷房を効かした小部屋の中、内から来る芯の熱さに圧倒されて汗が滲み出た。

「俺もお前を求めよう」

サツと体中の熱が沸き上がったかと感じた途端に熱は引き、息苦しいまでの悪寒に包まれた。

「いかなる時もお前と共に……」

そつと差し出した悠志の手に、愛は知らず知らずに手を重ね、涙を溜めて優しく口を開いた。

「……はい」

言葉を口にしたと同時に涙が零れ落ちた。

空に掛かった雲が部屋に差し込む光を遮って影を落とした。

凧咲という理想を求めながら、愛という従順な女性を我が身元に置く悠志。

「これを……」

何処からか取り出した浅葱色のネックレスを握りしめた拳を愛に差し出す。

掌を開いた瞬間に光が散らばり、直ぐに落ち着いた。

花冠フロラ。淡い浅葱色の光が灯る小さな宝石を基点に六枚の花びらで形作られる金細工。

金属部分が真ん中の宝石の光に反響して全体が浅葱色に染まった。「これは？」

悠志の差し出した首飾りを受け取りながら、手にしたアクセサリ

―を広げる。

「リィフロラ 甲いの花冠」

火でも灯っているかのように、首飾りの中で光がゆらゆらと揺れる。

影の射した愛の部屋は、幻想的に煌めいた。

「俺の力の一部で、契約の証。身につければ一時的に俺たちと同等の力を得る」

愛の視線は花冠に奪われ、恋焦がれたように心さえ奪われたような感覚に見舞われる。

「俺が持つ唯一のホリー聖具で、ロード主帝の力をクォーツ従臣に分け与える事の出来る道具」

つまりは悠志の力を愛に分け与え、愛にアニマ・アニムスに従じる力を与える道具。

実際にはマスターの力をそのまま受ける為に、クォーツの潜在能力を引き出せない上、代替制御と呼ばれる制限によってマスターとクォーツが合わさってやっと本来のマスターの実力と同等になるという曲者である。

「いついかなる時もこれを身につける事が俺たちの契約の証」

「……はい」

優しく、それでいて強く応えた。

浅葱色で満たされた部屋は、現実では有り得ない不可思議な現象と想像をそのまま真実として伝えた。

ACT・4 明鏡止水（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

次章からついに仮想的な場面が登場します！  
お待たせしました（汗）

では「ACT・5 奇想天外」でお待ちしています。  
see you again

## ACT・5 奇想天外（前書き）

毎度読んで頂いている方から、初読の方まで、大変長らくお待ちせ  
しました。

約二ヶ月ぶりの更新です（汗

当章はファンタジーとしての世界観が広がるものではありませんが、  
まだ、皆様が期待するようなハラハラドキドキの戦闘シーンはあり  
ません（あ

ですが、これを読んで今後の展開にご期待ください

また、当小説のタイトルが正式に決定した旨もお知らせします。

これから記載されるタイトルは

「Neutral」ではなく

「ノルンの足枷あしかせ」となります。

タイトル、冒頭、章タイトル。

全てを頭の片隅において、小説を読んでいただけると大変有り難い  
です。

長くなりましたが、これから第五章「奇想天外」が始まります。

携帯の方は次ページへ、PCの方はそのままスライドしてお読みく  
ださい

それでは、後書きでお待ちしています。

## ACT・5 奇想天外

空に引いた一本の線と  
海に引いた一本の線と  
山に引いた一本の線は  
みんなおんなじ色の線でも  
みんな違った表情を浮かべて  
みんな違った想いを寄せて  
それでも自分を信じてそこに  
凜と強く映えて立つ

M i l s h e l c   A i n i a

魔法。

誰しもが一度は使いたいと願う物理法則を無視した超上の力。

未来予知、飛翔、透明人間などなど、目的は違えどその力に憧れを抱くのは人間の人間たる理性に則ったもの。

故に人は古来より黒魔術や占術のような俗にオカルトと呼ばれる分野に属する幾何学的な力を追究し、現在に至っている。

黄金の夜明け団から独立したアレイスター・クロウリーもソレを求めた一人である。

また、現在に至ってもその情熱を捨てきれず、人知れぬ場所で実験を繰り返している輩も多からず少なくない。

魔法。

神秘の力、奇跡の力、古代の力。その魔法が形を成して現代に現れた。

その名を『ジン』。鏡界（アニマ・アニムス）に由来する不可思議な現象を魔法と類似するものとしてそう呼んでいる。

また、ジン<sup>ジン</sup>を宿した人間及びその他の物質を宝礼<sup>ジン</sup>と呼び、その内の使者となる者を主帝<sup>ロード</sup>、武器となりて使われる者を従臣<sup>クォーツ</sup>と呼ぶ。

ロードとクォーツは対となりて互いの力を掛け合わせ、大いなる力を使役する。

その力は地球<sup>アース</sup>と呼ばれる、人間が本来生まれ落ちる世界にまで及び、やがてそれを鎮圧する部隊が現れた。

当初、神々が組織した防衛部隊と呼ばれた三つの部隊。

一つは守護部隊。鏡界に於ける異常な力のぶつかり合い及び独断による使役を監査し、地球に影響を及ぼす可能性が認められれば直ちにそれを停止させる。

次に星霊部隊。鏡界で起こった何かしらの事象が地球に影響を及ぼした際に、崩れた地球の均衡を修繕する。

最後は精鋭部隊。いわば守護部隊の上級組織。守護部隊に於いて拘束できない宝礼<sup>ジン</sup>を停止させ、刑罰を与える組織。

当時の少なかったジンアの中で世界秩序に力を奮った英雄たち。故に自らに抱くプライドは高く、精鋭部隊の中では階位を定めていた。

より強く、より大きな業績を経て、全ての頂を統べる者へ……。そして、頂点への憧れが禍を呼び起こす。

鏡界を統べていた神たちの嚴重なる防衛部隊の管理の下、ジンの使役を制限された精鋭部に属したジンアたちが、神々に謀反を起こした。

神とジンアたちは7日に渡る互いに大きな損害を齎した聖戦を終え、神はジンアたちの手が及ばない清浄なる聖界<sup>ユートピア</sup>へ、ジンアたちは神々が忌み嫌う魔界<sup>ディストピア</sup>へと退いた。

やがてユートピアへと逃れた神々は、幾度と天兵をジンアたちの元へ送り出し、ディストピアを窮地に追いやるが、ディストピアの頭首であり、悪魔たちの王でもある”ルシフェル”によって多大なる被害を被った。

後に”伊弉諾<sup>イサナノ</sup>””伊弉弥<sup>イサミ</sup>”の二柱によってこの戦が鎮められるま

で、二つの相対する勢力は交戦を続け、互いの勢力は確実に衰退していった。

聖戦によって壊滅の危機に追いやられた庭園<sup>エデン</sup>。残された星霊部隊と守護部隊は各地の修繕に尽力していたが、無差別に力を奮うジニアたちが現れる度に出動する守護部隊は実質的な修繕は適わず、星霊部隊も本来の修繕対象とは異なるエデンを対象にするため、勝手の違う環境に難を極めていた。

だが、立場的に中立を通すエデンの住人は、二つの勢力からの圧力を受けながらも、独自の文化を確立した。

ハートシステム。地球に在中するジニアの種たちを鏡界へと勧誘し、能力を開花させることで、新たな人員補強による修繕活動の促進、ジンの研究などに利用した。

ユートピア、ディストピアの住人もハートシステムをそのまま利用し、新たな兵力を生み出し、蓄えることでいつ起こっても不思議ではない二次聖戦に備えていた。

そこでハートシステムの対象となったのが他でもない地球に住まう人間である。

手段を問わずに人間を自らの配下に置いたディストピアとは裏腹に、平和的に契約を結んだユートピアは、いつの日かディストピア（悪魔）からジニア（人間）を助けてくれるユートピア（天使）として定着し、神の御遣いとして讃えられていった。

人々は神を讃え、悪魔に怯え、やがてやってくる何かに恐怖しながらも、代わり映えのないマンネリ化した社会に愛想を尽かして、それでも平和に過ごすことの出来る地球<sup>せかい</sup>に慣れ親しんでいた。

ICTが常識となりつつある現代社会においてもそれは変わらず、一人ひとりが、地球で起こり得る些細な刺激を求めて生きている。

また、そこに介入する鏡界の行動も慎重になり、仮に地球の均衡を崩したとなればジニアの増員によって完全な復活を果たした星霊部隊によって修繕される。

今、全ての事象が並行して進み、歯車がカッチリとはまったぜん

まい時計のようにゆっくりと、それでも確かに時を刻みながら、巻き戻ることのないように回っていた。

すっかり日も落ち、黄昏に揺れていた影も姿を隠した。

「いよいよ明日」

窓の外に覗く景色の天井には星空が広がり、それを支えるように高い柱が数本聳え立っている。

産まれて今まで過ごして来た世界とおさらばし、新しい世界へと旅立つ時がすぐ間近に迫っていた。

「短かった筈なのに、とても長く感じられた二日間」

何年も付き合って来た仲間たちの本心を受け、いくつもの覚悟を背負う。

「ごちゃごちゃといろんな事があったけど、二人の気持ちがかつてよかった」

言葉を胸に仕舞って窓を閉めた。

同時にカラツとした空気がじわじわと熱気を運び、閉まりきった部屋に蔓延した。

「後の問題は藤崎くんだけ……」

エアコンの電源を入れて、肌身に心地よい風で空気を回す。

次第に温度は下がり、あっという間に、らしいと言えばらしい夏の空間が完成した。

「藤崎くんをお守り下さい」

浮かんでくる藤崎のビジョンを掻き消すように言って、倒れ込んでベッドに沈み臉をそっと閉じた。

睡蓮を模した虫避けの機器から漂う花の香りが、エアコンの風に乗って部屋中に広がった。

目を閉じればそこには闇が広がる。

凧もその闇に誘われて一夜を過ごし、運命さだめの日を静かに迎えた。

何の前触れもなく臉を開いた凧は、何かを掴むように腕を伸ばし、そこで空気を握りしめる。

「あなたは……」

そう言ったかと思うとそっと目を閉じ、開けた寝間着から覗く艶かしい肌を布団で被った。

蝉がどこと無く鳴き始め、それに合わせてハッと目を覚ます。

腰を起こして何かを探すように辺りを見回し、いつもと変わらない部屋を確認して溜め息を吐いた。

ただ、一つ違うのはそこにいる少女の表情。

悲しげにも見える顔の裏に潜む微かな希望。幼い頃に忘れて来た素直な想い。

風咲は「よしっ」と声を上げてベッドから起き上がり、丁度全身が映る大きさの飾り気のない銀縁の鏡の前に立ち、沸き起る高揚の気持ちを抑えられないでいた。

この世の理を知ったばかりの純粹無垢な望みを抱き、整然と立ち尽くす。

「今日が始まる」

見つめる先に広がる世界を思い描きながら、静かにそう呟いた。

マンネリ化した日常とそうでない世界の境界に立ち、そこから一歩を踏み出すか否かは既に決まっていた。

静か過ぎるようにさえ思える廊下を渡り、トントントと軽快に跳ねて階段を降りる。

例によって出張している父親や、いつも優しい笑顔で家事炊事洗濯を熟す母親ともしばらく会えなくなる事を考えて少し憂鬱になりもするが、それ以上に待ち受ける未来に希望を抱いて台所に足を踏み入れた。

「お母さん、ちょっと聞いて欲しい事あるんだけど……とても大切な話」

「何？ 進路でも決まった？」

まな板を叩く音が小さく響く中で千代の声が風咲の耳にはっきり届いた。

「うっん、違うの……？ 違わないのかな？」

あやふやな言葉の意味に迷わされながら、困った末に適当な言葉が喉をついた。

「何おかしなこと言ってるのよ」

依然優しい微笑みを浮かべている母親が、作業を中断することなく吐息を漏らす。

「でも……いいわ。後でちゃんと聞いてあげる。だから先に顔でも洗ってらっしゃい」

一度も振り向かずにとさういとうと、切り刻んだ人参や大根など小鍋に放り込んだ。

「……」

洗面所に向かう凧咲の姿が見えなくなると同時に千代の口が小刻みに震えた。

同刻、藤崎悠志宅に光が瞬く。

「行くぞ、祝炎<sup>ブラム</sup>」

「我が主君の命のままに……」

淡く光る浅葱色の指輪が藤崎の左手中指におさまる。

普段立てている髪を後ろで纏めて黒いゴムで留め、掌でちらつく緑色の炎を握り潰した。

煌めいて落ちる火の粉は次第に光を失って、床に落ちる頃には消えていた。

「夢を夢で終わらせない」

ぼんやりと浮かぶ儂い希望を抱いて呟いた。

凧咲の姿だけを追い求めて、それを阻害するもの全てを切り捨てる覚悟を決めた。

他の全てを失っても、凧咲だけは必ず手に入れる。そんなエゴイズムが藤崎をつき動かしていた。

「凧咲だけは……」

いつだって受け入れる覚悟で凧咲を待つ。

凧咲が求めなくても自らの意志を突き通す。

そういつた一方通行の想いが周囲に強く干渉した。

「主君が身元に仕え、幾時主君が御身を守衛せん事を……」

ゆっくりとした口調で女性の声が響く。低く響く声は、どこか一点から聞こえてくるのではなく、周囲から藤崎の左中指にはめられた指輪に向けて響いて来た。

”浅葱なる火焰 祝炎 ￥”。過去の防衛部隊の一つである星霊部隊の由来、サーヴァント星霊である。

「お前にも迷惑をかける……」

「いえ、私は貴方と誓ったのです」

プラムは響き渡る声を抑えて、微かに聞こえる程度でいった。

窓の外はまだ少し暗がり残り、徐に昇ってくる太陽に合わせて建物の影が深くなる。

蝉を中心に虫たちの合唱も大きく鳴り響き、この一日を讃えているようにさえ思わせた。

清淀祭。御上市で開かれる祭の中では一番の大きさを誇り、太古から続く伝統的なものとして催されている。

参加者は問わず、幅広い年齢層から愛され、次の日の新聞を大体的に飾る。

その祭に紛れて藤崎は仄咲を暮羽から奪還し、そのまま鏡界に逃げ延びる。

「ありがとう」

「いえ……」

清楚とも上品とも取れるプラムの静かな声が、語らずに続かない会話の終わりを告げた。

藤崎が窓から外を覗く。

建物の隙間から覗く太陽が完全に顔を出し、御上市を淡い茜色に染めていた。

かつて生き別れた双神の一柱が黄泉から帰り、初めに訪れた土地が、ここ御上市。古くは大御上神宮と呼ばれた御上神社で祭礼の儀を取り計らい、この地に繁栄を齎した。

今日ではその繁栄を知る者も少なくなり、影響も薄れつつある。そして、今日がその運命の日、清淀祭。又の名を黄泉よもつがえ帰り。

藤崎は住み慣れた家から出て、賑わう町並みに向かう。

商店街の北方に広がる農地の中央道に沿って人の列が出来、更に北に向かうと御上神社がある。

その道中は人込みで身動きが取りづらいほどに人で溢れていた。

「まったく気楽でいいよな、こっちの人間やつらは」

人込みを眺めたかと思うと人の集まった御上大橋からそっぽを向いて、90度向きを変えた。

「プラム、設置型か時間差を利用した魔術マジックを使えたか？」

「……リビアはいかがでしょう？」

「ああ、散花リビアか……。気付かれずに扱うには丁度いいな」

そう口にするると公園に向けて足を運び始めた。

「しかし、主君。リビアを制御したまま守護魔術ディフェンシアを保つのは限界があります」

「それなら守護魔術を外せばいい、そういう事だろ？」

「確かに。しかし……」

心配する星霊スターヴァントを軽くあしらうように左手を肩より少し高い位置に上げて制した。

「そう心配すんな、俺だって馬鹿じゃねえよ。策の一つや二つ考えである」

自らの主の対応を聞いて、プラムは心配を胸の底に置いて押し黙った。

藤崎の無茶を知りながら、それすらも承諾していた。

祭で活気が溢れる御上市。隣接する市町村からも来客が訪れた。

東西に一本ずつ伸びる主要道路がそれぞれ商店街と住宅街を通る。更に商店街と住宅街を御上大橋が繋げて見事なH文字を象っている。

御上神社とそれに続く道路は完全に人込みに吞まれ、商店街から南に伸びる神楽通りと御上大橋にさえ無数の人間が蔓延っていた。

「あつ、如月さん」

いつもは殺風景な農地もこの時ばかりは屋台と御上高校の催し事によって盛り上がっている。

「あれ？ 気付いてない？」

子どもから大人までが着物に身を包み、カタカタと下駄を鳴らし  
ている。

日は高く、支度が早過ぎるようにさえ感じられるこの日頃に、人  
込みを掻き分けて歩いていった。

「お、気付いた気付いた。おーい」

暑い日中に水槽に放り込まれ、多大な迷惑を被る金魚たち。行く  
先々が壁に囲まれているからか、妥協して一心不乱に泳ぎ回った。

「良かった、まだ発つてなかったんだね」

的確に的の中心を撃ち抜くも、びくともしない商品に憤りを感じ  
ながら、これでもかと引き金を引く。

「そつちの方が昨日言ってた？」

半球の凹みが無数に列なる鉄板に刷毛で油を引き、小麦粉と卵を  
だし汁で溶いた生地を凹みに流し込んだ。

生地で満たされた凹みに、カットされた具材を手際よく放り込み、  
しばらくして生地をひっくり返した。

「そう、よろしくお願いします……って言っても直ぐに此処から離  
れちゃうんだっけ」

鬼やひよつとこ、キャラクター等のお面がぞろぞろと飾られ、一  
目にも見知った顔がそこに浮かぶ。

「そつか。今日の六時に……もし、もし良かったらだけど」

着物を着て、腰に団扇を挿した少年が紙切れに書かれた数字と賞  
品の番号を見て喜んだ。

「それまで一緒に居させてもらえないですか？」

神主が身体の襷ぎを終えて、浄衣を身に纏う。

「ホントですか？ ありがとうございます。四時ですね、必ず守  
りますから」

横笛の高い音色と調緒で縛られた小鼓の打音が響き、そのリズム  
にのって二人一組の獅子舞が鼓舞を演じる。

「行こつ、如月さん。もうすぐ始祭の儀が始まるよ」  
空に散った雲はどんどんと高く昇る。

陽射しは強く、風は緩やか。例年に見ない猛暑が、気怠さを跳ね  
返して皆のテンションを上げ、清淀祭の開催を祝うかのように雲を  
消した。

ジリジリと照り付ける太陽の下、少年少女は歓喜に泳がされ、無  
我夢中で住み慣れた街を跋扈する。

熱気に包まれた街中の人々が誰一人気付かないまま、運命の歯車  
は悲鳴を上げた。

御上神社本堂の目先に凧咲の手を引き、人の群れを掻き分けて歩  
く少女。

「朝比奈さん、ありがとう」

「ううん全然。暮羽さんがいい人で良かったよ」

進めば進む程に人の密集度が高くなる。ただ歩くだけだというの  
に、平凡な日常とは打って変わって難を極めた。

「そつ、暮羽さんはいい人なんだけどね、ちよつと非常識な存在な  
んだ」

語尾を聞こえないように小さく呟く。

依然、凧咲の手を引いて人込みを進む朝比奈優美あさひな ゆみは、聞こえなか  
った語尾について問い掛けるが軽くあしらわれた。

「気にしないで、こつちの話だから」

そつとだけ言つと、奥から出てきた老けた神主を指差して意識を  
反らし、つかず離れずで後をつける暮羽に視線を送つた。

契刀と呼ばれる陣太刀を腰に挿して、燃え盛る炎の前に立つ神主。  
炎の糧となつているのは、布団や木製の家具、タオルや畳といっ  
た使い古して使わなくなつた物である。

神主は血管の浮かび上がった手で腰に挿した刀の柄を握り、じわりじわりと炎に近寄ると、威勢のいい掛け声と同時に鞘から刀身を抜き、横一文字に炎を両断した。

渾身の一撃は炎を掻き消し、そこには熱を帯びた燃え残りが山となっていた。

かつて神によって行われた祭礼の儀を模した儀式。その一つが始祭の儀である。

「ほう、あの爺大した使い手だな……しかし、もう長くはないか」  
暮羽が横目に神主を見つめる。

「ふん、結局は力だ。ジンを宿していても、力がなければ存在の意味はない」

重く低い声が暮羽の頭にだけ響いた。

雷獣シュバイン。暮羽のジンが意志を持ち形を成した存在。藤崎悠志の祝炎もそれと同等である。

俗に精霊や聖獣という認識で取り上げられるそれらの存在は、ジンと呼ばれる力が意志を有し、無形体と装飾品アタッチメントの形態変化を可能にした者。

暮羽の右耳に付いている青いピアスがシュバインの装飾品としての形態。同じくプラムの装飾品形態は指輪で藤崎の左手中指に嵌まっている。

「人は脆い、致し方ないというものだ」

そう言って老いぼれたかつての宝礼シニアを見遣ると、視線を尻咲に戻して見守った。

「……」

二人はそれ以上会話を繋げず、それっきり黙り込んだ。

感嘆と拍手が御上神社本堂を取り囲む中、尻咲だけは静かにその様を見守っていた。

そこに宿る力を、神主の発した力の波長と似た力の波長を知っていたからこそ、刀身を納めた神主の瞳を睨み付けた。

額に汗を滲ませ、顔一面に皺を寄せた神主は、真っ直ぐに自分へと注ぐ鋭い視線に気付くと、それに向かってにこやかに微笑んだ。  
「迷っておるようじゃな」

急に響く老人の声。凧咲は周りの人々がその声を気にしない様子で騒いでいるのを窺い、何らかの手段で直接自分に声を送っている事に気付く。

「来んさい。求めるものがあればじゃがの……」

そもそもこの騒音の中で老人の声が鮮明に響く訳もない。響いたとしてもそれだけの音量で叫べば誰しもが気付いているはずだった。凧咲は人の波に揉まれながら、自然と本堂に足を運ぶ。

「ごめん、ちょっと待ってて」

優美に一声かけて人込みに吞まれた。

押し寄せる波は荒く、右往左往としている。

必死に堪えながらも、本殿の脇にある小さな隙間に逃れた。

「朝比奈優美という友達と一緒にいるのではなかったのか？」

不意に後ろからかかる声に驚いて振り返ると、煙草を口にくわえて左手で覆い、右掌で火花を散らした。

「暮羽さん、ちょっとの間だけ席を外してもらってのは出来ない相談かな？」

煙草の先端が赤い光を点した先から灰になって崩れていく。

「藤崎悠志……という訳でもなさそうだな。ここの神主の爺か」

藤崎の名前が出た瞬間違うと叫びかけた凧咲だが、続いて暮羽の口が開いたのを確認すると押し黙って耳を傾けた。

その内容は凶星についており、凧咲は焦りを感じて言葉を探した。  
「えっと……」

「構わない」

「えっ？」

間を埋めるために挟んだ言葉を制して、突発的に返した。

「会いたい、会って話をしたいのだろうか？ 俺はその許可を出しただけだ」

ふんつと鼻を鳴らしたかと思うと、先程くわえた煙草は殆ど灰になつており、その灰ごと残つた煙草を握り潰した。

粉塵が舞う。煙草から漏れる煙の臭いが目に見える形となつて広がつたようにさえ感じられる。

「行くのdarou? 時間は制限させてもらつ。そうだな……十分だ。友達も待たせているのdarouしな」

壁にもたれ掛かつて煙草に更けていた暮羽は、誰にも気付かれないうちに細心の注意を払つて跳躍した。

「ありがとうございます」

既にほとんど見えなくなつた暮羽の姿を見つめながら、一際大きく声を上げた。

十分という短い猶予の中でどれだけの事が出来るか。それだけを胸に本堂の正面に立つた。

「やはり来おつたか」

柔らかい微笑を浮かべて一段高い敷板に座っていた。

「上がりんしゃい」

入口の横に立つた見張りの二人の巫女も同じように微笑むと、どろどろといった風に手を差し出して風咲の本堂入りを促した。

そつと敷居を跨ぐと、どつと違和感が押し寄せた。

ビクツと一瞬のけ反りはしたが、直ぐに体勢を立て直すと、二人の巫女にお辞儀をして歩を進める。

「その反応からすると、まだアニマには行つたらんようじゃの」

綺麗に磨かれた木板の廊下を歩きながら、神主の老人が言った。

風咲は「はい」とだけ言つて、老人の言葉を片言隻句も聞き漏らさないように注意深く耳を傾けた。

「人はの……」

四畳半の小部屋に入り、二枚の座布団が敷かれているのを確認すると、神主は徐に座り込み、風咲にも座るように促した。

「自由であり、平等なのじゃよ」

相槌をうつて頷く。

「じゃがの、それらは究極な所までくると矛盾になってしまつての、  
ややこしい話になつてしまふんじゃわ」

「はい、分かります。自由でありながら、他人との平等を観点にお  
くと必ずしも矛盾が生じてきますから」

適当に組んだ足を直して、胡座をかくと納得のいった表情で首を  
縦に二度振つた。

「お主は利口な娘じゃの。名は？」

「如月、凧咲です」

腕を組んで眉間に皺を寄せる。ハツと何かに気付いたように口を  
開いた。

「元さんの所の娘さんかいの？」

威勢のいい声が畳敷きの小部屋に響いた。今までの静かな口調と  
は違い、生き生きした躍動感のある声が凧咲の返事を遅らせた。

成程、といった風に首を縦に軽く振り、直ぐに前に向き直つて姿  
勢を正した。

「申し遅れた。僕は御上神社現頭首、北条日奈<sup>ほつじょうひな</sup>。かつて元さんと旅  
を重ねた古き仲間じゃ」

度肝を抜かれた凧咲は、あまりの驚きに声さえ出ない。目を丸く  
して大きく見開いた。

「なんじゃ？ 元さんはそないな事も伝えとらんのか……まあ良い  
わ」

訛つた口調で話す日奈は、凧咲の了解を得ずに次々と話を進めて  
いく。

一目に埃一つ見当たらない畳や襖などの隙間、磨かれて独特な光  
沢を見せる柱からは清潔感が漂っていた。

障子と襖で区切られ、木板と畳が敷かれた風貌とそこから漂う香  
りは、緊迫が続いていた凧咲の心を少しずつ落ち着かせていった。

数秒続いた沈黙を打ち切つて、日奈が口を開く。

「さて、諸々はまたの機会にして、お主の用件は何かの？」

日奈の瞳が鋭い光を点し、話を飛ばしていきなり本題に入った。

「あつ……と、少しややこしい話になるんですが」

満面の笑みで優しく話し掛けてくる日奈に心を預けて、鏡界を知った経緯や暮羽の襲来、対立関係にある現状など今までの顛末を簡潔に伝える。

宝礼ジニアの発する独特な波長を感じとる索罔シート。それを完全に遮断する孤立した空間で、二人は短い時間を思索に費やした。

日が昇って、また次の日が昇るまで。御上市のその四六時中は熱気に包まれて止まない。

夜の帳とほりが降りた後も、深夜を通して一晩中がありふれた日常と摩擦して輝く。

単に祭を楽しむ者から、この一日に運命を預けた者まで多種多様の面持ちで賑やかな清淀祭に耽っていた。

緩やかに射す太陽の光が人々の影を集めて深めていく。人であるが故に何も知らず、知らされず、平々凡々の疲弊した世界を生きていた。

鶏群一鶴だけがその世界を外れて、自らの足で歩いていく。

誰かに指図される訳でなく、自らの意志で。

全て我が為。理性のままに前へ前へと足を運ぶ。

「リビア設置完了。これよりリビア制御状態に移行します」

木の上、遊具の陰、砂場。それぞれに点った浅葱色の光が、少しずつ姿を隠す。

「よし、次だ」

藤崎が息を荒くして言った。

「やはりリビアの多重設置は今の貴方には負担が大き過ぎます。それに……」

「プラムッ」

人としての形を持たない星霊の言葉を遮って藤崎が声を荒げる。

心底からの怒りではなく叱咤の怒り。その心情が声となって発せられた。

「承知しています。あの方が主君の光なのだ……」

寂しそうに、何かを求めるように語尾を小さくしながら呟いた。空には閑散とした太陽が眩しく輝いていた。

雲一つない澄んだ晴天。街並みに降り注ぐ日差し。風に揺れる草木花。

何もかもが”現在”<sup>いま</sup>という景色を作り出して、各々に影響しながら広がっていく。

それは連鎖。一つの波が波紋となって広がり、新しい波紋と合致して広がる。

日差しが風を生み、風が草木を薙ぎ、揺れた草木が互いに触れ合っ  
つて音を奏でる。その音すらもが景色に同調して、生き物それぞれに接触した。

それは負の連鎖も然別。何かしらの悪事が働けば、それに呼応して広がる。

正は負を、負は正を、或いは同じもの同士を飲み込みながら、大きく広がり世界を造っていく。

「お前たちは、<sup>サイヴァント</sup>星霊か……」

本堂の前に並んだ二人の巫女に話し掛ける。

顔立ち、服装、身の丈、それぞれがうり二つ。髪型と装飾品の位置が相対し、二人の間を割ると丁度左右対称になる。

シンメトリーな二人は、微笑んでそれぞれ左右に首を傾けた。

「お入りになられますか？」

二人の声が重なって響いた。暮羽の問いに答える訳でなく、目の前のジニアに対して素直な反応を遣す。

「いや、構わない。しかし稀有な存在だな、君たちは」

簡単に言葉に意味深な言葉を付け加えて返し、身を翻して人の群れに視線を移した。

微笑んだまま「ふふふ」と笑う二人の巫女は、そのままの表情で去り行く暮羽の背中を見つめた。

暮羽は人込みの少し外れた所に朝比奈優美を見つけると、滑るよ

うにして人と人の間を掻き分けて進んだ。

「朝比奈といつたか？」

不意に飛んだ言葉に驚いて顔を上げ、視界に飛び込んで来た顔を見て更に驚く。

「あ、はい。朝比奈優美です」

肩に少し被る程度に伸びた髪。着物姿に合わせて髪を結び、花型のピンで止めている。

額と首筋にじわりと汗を滲ませて、うなじの辺りからはうっすらと香水の香りが漂った。

「如月風咲は……」

「如月さんは……」

声を重ね、引け目を感じて口を止める優美。暮羽は一瞬戸惑いはしたものの、優美が口を閉じたのを確認すると続けて言葉を紡いだ。

「この神社の神主の所に用があると行って出掛けた。何でも奉物を供えに行くとか……」

「成程。あ、でも供え物なんて持ってたかな？」

疑問に浮かべた思いを「まあいいか」と簡単に打ち消すと、困った風を装っていた暮羽を見つめた。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもないさ」

実際との矛盾を流してくれた事に安堵を感じながら、優しく微笑んで優美の手をとった。

優美の手を重ねたまま本堂の手前まで引つ張っていく。後ろの優美を顧みず、多少空いた人込みをすり抜けてそっと立ち止まった。

「ど、どうしたんです？」

あまりの急な誘いを受け、戸惑いを隠せずにいる優美。

間もなくして風咲が本堂から現れるとその疑問も晴れ、直ぐさま風咲に意識を向けた。

「如月さんっ」

大きく手を振って、満面の笑みで迎える。風咲もまた容貌端麗な

笑顔で応じながら小さく手を振った。

「ごめん、待たせた？ あれ暮羽さんまで……」

腕を組んで敵つく立ち尽くす暮羽の背中を数秒眺めると、階段状になった小さな段差をぴよんと飛び降りた。

「うん、暮羽さんが私に教えてくれたの。如月さんが神主様に奉物を渡しに行ってるって……」

刹那、思考を巡らし暮羽の配慮を確認する。

「ちょっとね……お父さんと古い仲で、次の清淀祭の際に渡しておいて欲しいって言われてたから」

話の流れを汲み取った凧咲の様子を確認すると、暮羽は静かにその場を去っていく。

それに気付いた優美は、御礼の言葉と一緒に腰を曲げて一礼した。「さ、行こっか。綾たちもあっちにいるんだよ」

優美が凧咲の手を引く。ほんのりと温かい掌に体を預けて、優美が進むがままに凧咲もそれに従った。

「本当に行っちゃうんだよね……」

「……うん」

周りの人間とは明らかな温度差を感じさせる。さっきまでの元気とは裏腹に一瞬にして声のトーンが落ちた。

「藤崎くんも、笠音さんも……」

凧咲は何も答えずに小さく頷き、そのまま俯いた。

「ごめん」

本堂周辺の人影は少なくなり、代わりに背高く育った楠の影が細長く落ちていた。

「いいよ、今は……」

全てを語ろうとしない凧咲への想いを封じ込めて、優美は微かに滲む涙を拭った。

「でも、いつかは絶対に話してもらおうから。どうして行っちゃうのかも、行った先で何があったのかも……」

俯いたまま大きく首を縦に振って、今にも漏れ出しそうな想いを

押し込めた。

「絶対の絶対……」

そうとだけ口にして、他の全てを飲み込んだ。

まだ日も高く、影が薄く短い。鎮守の杜もりである楠の影だけが長く濃く、地面に線を引いた。

風の音だけが寂しく響き、ざわざわと草木を揺すった。

如月凧咲はクラスメートと賑やかに清淀祭を過ごし、藤崎悠志は祝炎ブラムと御上市を回る。暮羽数名はといえば、凧咲を十数メートル離れた所からずっと監視を続けていた。

「私には何が出来るんだろう……？」

浅葱色のネックレス” 弔い花冠”ルーフローラを首から提げて、先が見えない未来への苦難を重ねる。

求める物がすぐ目の前にあつて、それでも腕を伸ばし切れない。向こうから向かって来る事は叶わず、自分がひたすらにそれを追い求める。

そこに少年を一人置いて、願う事しか出来ないでいた。

「藤崎くん……」

その後の言葉を口にするかしないかで悩み、口にした時の恐怖の事を考えて、言葉と一緒に飲み込んだ。

言ったら退けない。そうなったら進むしかない。その思いが、足枷となつて少女の行動を妨げた。

「ずっと一緒にいたい。ただそれだけなのに、それだけがどうしてこんなに難しいんだろう……」

視界に広がる天井の点々とした模様を眺めて、理想を追いかける自分を想像する。

走って走って躓いて、それでもずっと走り続けていた。

「理性のままに、か……」

悠志が凧咲に投げた言葉を拾って、理想の自分に重ねた。

ルーフローラを握り締めて、金属特有の冷たさを感じながらそこ

に潜むほのかな温かみをも感じる取る。

花びらの角がチクツ刺さり、軟らかな痛みを掌に広げる。

それでも尚ルーフローラを離そうとはせず、更に強く握り締めた。

(どうしてこんなになっちゃったのか分からない……)

瞳を潤ませて涙を溜めた。

(でも、どうしても胸が張り裂けそうなの)

憧れの彼の表情を浮かべて。

(大好きなの……)

「藤崎くんっ」

深みから這い上がるうとする想いが喉をつき、溜まりに溜まった涙が頬を伝って布団に零れた。

淡い桃色のシートに滴る涙は、果てぬ想いと共に染み込んだ。

「ねえ……苦しいんだよね」

天井に広がる模様を掴み取るように腕を伸ばして、柔らかく拳を作る。

左手に握り締めたルーフローラを隆起した胸の上に乗せ、そこに右手の拳を重ねた。

孤独と嫉妬に胸を締め付けられ、心が壊れそうになる。その痛みを和らげるかのように、そのままそつと瞼を閉じた。

天壤に映える太陽が西向に傾きかけた頃、ゆっくりと御上市に影が伸びる。

時計は少しずつ歯車を狂わせ、ゆっくりと時を刻み始めた。

## ACT・5 奇想天外（後書き）

いかがでしたでしょうか？

とは言ってもまだまだ序の序、やっぱり燃えれませんか（汗

自分でも回りくどく感じ始めました（自重

ということとで次章が真正正銘のファンタジー感溢れるストーリーとなります。

是非、次回もいらっしやってください

未長くよろしく願います

どうぞ、ご贖ください。

それでは次章「ACT・6 堅忍不拔」でお会いしましょう

## ACT・6 堅忍不拔（前書き）

お久しぶりです

ノルンの足枷の作者アイニヤです

最近一層と寒くなって参りましたが皆様いかがお過ごしでしょうか？

私は、毎日時間が空くたびに凍えた手で携帯にメモ代わりとして文章を打つ日々が続いております^^；

さて、前置きはこの程度にして、ようこそ皆様！

今回初めていらっしやった方も、今までの作品を見てきてくださった皆様もご来場ありがとうございます

さてさて、もっとお礼を申し上げたいのですが皆様は長いスピーチを読みに来たのではなく、本文を読みに来てくださったのですからこんなところで足止めを食わしてはいけませんね^^；

ということで「ACT・6 堅忍不拔」をご覧ください

## ACT・6 堅忍不拔

過去の私が消えたとしても、今の私は消えやしない。

未来の私が消えたとしても、何も変わりはない。

ましてや今の私が消えた所で、世界の理に触れたりしない。

移ろい行くのは時の流れと、ただそこにいる私だけ。

Milshelic Ainia

御上市全体がほのかな茜色に染まる。

時計の秒針は力チ力チと確かに時を刻む。短針はぴったりと数字の六を指し、長針は真つすぐ縦に伸びる。

その頃になつても人影が少なくなる所か、御上神社から商店街を抜け、神楽通りまで伸びる一本の道路にさえ街中の人々が蔓延っていた。

賑やかな清淀祭の余波を漂わせながら、個々が自らの理性を崩壊させる。

「ハア、ハアッ」

その中に一点、希望と野望をその胸に抱く少年がいた。

浅葱色を点す星霊プラムが一柱。藤崎悠志を主君とし、それに忠実の限りプラムを尽くす祝炎もそこに居た。

ただ、プラムは実際的にそこに居るだけで、物理的な姿形を模している訳ではない。装飾品の指輪アタッチメントとして存在する特殊な道具に、己が意思と力の一部を転移させた契約具として地球アースに存在していた。

「此処で終わりですね？」

透き通るような凜とした声が、主君の身を気遣って心配そうに言った。

中距離走をスタートからゴールまで全力で走り抜けたかのように荒々しい呼吸が響く。

「ありがとう。しばらく休憩した後、作戦に臨む。お前も休んでおくといい」

プラムは相槌をうって悠志の言葉に応えると、御上市の至る所に設置した散花リヒェアの数を数えて哀しみに耽った。

ジリジリと照り付ける太陽の光が真横から射す。全ての影は横に長く伸び、茜の世界を飲み込んでいく。

「やっとな」

生い茂った草花も今ばかりは息を殺している。

藤崎悠志を中心に北側にやや広がった楕円形の公園。そこに二つの影が落ちた。

「待っていた……というよりは待ち侘びたといった感じか？」

横に並ぶ女性を後ろに隠して、口を開いた暮羽は右耳に青いピアスを煌めかせ、公園の仕切りで立ち止まった。狂気にも似た血に飢えた獣の形相がそこにある。

悠志は夕日を正面に構え、赤橙色の光を瞳に点している。

「準備はいいのか？」

低く重くのしかかるような声で挑発すると、右手の人差し指と中指を揃えて悠志に向けた。

ピタツと音が沈む。草木は確かに揺れ、心臓が鼓動する感覚も手に取るように悠志を包む。

刹那、悠志は右に跳ぶと、体から漏れる熱気を掠め取るようにして一筋の稲光が走る。火花が散るようなバチツと甲高い音が響いて、今そこに悠志がいた空間を貫いた。

「初突の紫電を避けるとはな……。ここで朽ちねば中々の猛将になれるやも知れぬ」

戦の口火を切った暮羽の一撃。両者体勢を立て直すと、再び向かい合うようにして静止した。

「もう一度試してみるか？」

暮羽の眼をじっと睨みつけての挑発。一対一の真剣な眼差しがぶつかり合った。

「良かるう」

右手を前に出して先程と全く同じ姿勢をとる。

「雷鳴駆けるは刹那の刻よ、大気を裂いて突き抜くは瞬雷。雷槍の――紫電コイル」

言葉を紡ぎ終わると同時。真横に跳躍した悠志の左手をまるごと焼いて、一瞬の内に突き抜けた。

悲痛の音が音にもならない。瞬間的な痛みが走り、肘から下を殺す。

一秒程遅れて弾けるように地響きが重く鳴り響くと、それに釣られるように藤崎の左腕が悲鳴を上げた。

「ぐっ……」

初めの一撃のように不意な攻撃ではなかった。それどころか攻撃のタイミングを完全に見切ってさえいた悠志は、今の自分の置かれている状況を信じられないでいた。

神経が焼き払われた左腕には違和感だけが残る。

「油断したな」

左腕を押さえながら立ち上がる。

「違うな。油断していなかったとて避けねはしない」

皮の剥げた暮羽の右手には緑鱗が光っていた。紫電の衝撃が人としての暮羽の擬体を弾け飛ばしたのだ。

「貴様のソレは油断ではない。ただの”過信”だ」

口を動かしながら公園に踏み入る。凧咲は胸の前で両手を組んで、祈るような形で目を瞑っていた。

「そう喚くなよ、まだ始まったばかりだ」

左腕を支えながら崩れた体勢を徐に直していく。いかにも致命的

な一撃をその身に受け、それでも尚挑発する。

「第一クリア関門通過」

俯いたままの悠志がそう呟いたか否かといったタイミングで、凧咲の姿が茜に染まった煙に包まれる。

「続いて散花シビア」

凧咲を包んだ煙が風で吹き飛ばされるようにサツと流れる。やがて煙は細々と散って凧咲の姿と共に消失した。

「流石に一筋縄ではイカンな。シュバイン、網を張れ」

霧と消えた凧咲の姿を確認する訳でもなく、自らの星霊サーヴァントに命令する。当の星霊は頷きとも聞こえない低くのしかかるような音で

唸った。

「雷槍の三”鎖縛”」

悠志に向かつて走り出す暮羽の頭上で光が弾けると、棒状に伸びた無数の光が公園周りを囲った。

バチバチツと火花が散るような音を立てながら、距離を詰める暮羽。後数歩にまで近付いた所で急に足を止めて周りを見渡した。

「過信していたのは俺の方が。しかし……」

そう言って立ち止まる暮羽の前で、悠志の姿をした煙が、凧咲の時と同じく雲散霧消した。

轟々と低く擦り合うような音が暮羽を包む。暮羽は目を瞑って神経を研ぎ澄まし、展開した砂縛を広げる。

「ああ、最初から芝居だったという事だ」

返事のない相手に言葉を飛ばす。

「何、心配はいらん。何より如月凧咲には細工しておいたからな」依然鳴り響く轟音を気にする事なく、目の前で合わせた掌を少しずつ開いて、目一杯に左右へと腕を伸ばした。

ヒトの目には見えない鎖縛は暮羽の動きに同調して、次第に広がっていく。

それは宝礼シリアの力を以って初めて見ることの出来る力。

「違う、違う……こいつも違う」

網に掛かった宝礼を一人ひとり識別し、探索の張本人を探し出す。

「この街は何だ？ 異様にジニアの数が多い……」

横では轟と鳴く雷獣の声か幾重にも重なって響く。

それがヒトに見聞き出来るものであれば、騒音に外ならない。

「ん？ さつきから同じ奴ばかり……っ」

暮羽は閉じていた瞼をギンと見開き、空を見上げた。

「よう、探し物は見つかったか？」

宙に浮いた悠志の影が暮羽を蔑むと、スツと音もなく消え去った。

人の形をした暮羽の頬を汗が伝った。

藤崎悠志の形をした幻影がふわりと景色に溶け込んでいく。

暮羽はそれを目の当たりにし、それでいて慎重に事の次第を読み取っていた。

「設置型の幻術魔法か……。大した術者だな」

御上市一面に広がった無数の宝礼反応。そのほとんどが悠志の存在を誤認させ、風咲の位置特定を攪乱させていた。

「後の戦、少々楽しめそうだ」

不利な状況下で尚笑っている。天兵である一騎士として手応えのある相手に歓喜していた。

より一層轟く雷獣シュバインの呻き。落雷の如く響き渡った。

「天兵、暮羽数名、推して参る……」

その声が響くより速く、暮羽の姿は幻影を追った。

一つひとつ、着実に宝礼の反応を消滅させて紫電一閃の如く御上市を駆け巡る。

その姿は最早人に非ず、緑鱗を身に纏った人型の蜥蜴がヒトの肉眼では捉えられない速度で疾走していた。

「雷槍の二”走雷”」

真横から射す太陽の日差しが普段そこにある筈の景色を一変させ、幻想的な世界をそこに気付いている。

その幻想に応えるように、それこそ幻としか言いようのない現には信じ難いソレが一瞬の内に街中を駆け抜けた。

悠志たちは軒並み高いビルの路地裏に身を潜め、現状把握と次に行うべき行動を詮索する。

「よし、思ったより計画通り。凧咲には申し訳ないが、このままお前を庭園<sup>エデン</sup>に送る」

悠志の目の前で、腰まで垂らした長髪の女性が息を荒くして壁に身体を預けている。

「どうして？ 構わないでって言ったのに……」

絶え絶えに漏らす言葉に返事はなく、我勝手にと次の行動へと移行する。

御上市を跋扈し、一面に撒き散らされた散花<sup>リビア</sup>を一つひとつ潰して回っている暮羽。

その時間稼ぎを都合に入れて、新しい段階へと突入する。

「リビアの残数は？」

「既発動が20と未発動が30。幾分制御が容易になりました」

二人しかいないその空間に第三者の綺麗な声色が響いた。

「これって……？」

星霊<sup>プラム</sup>“祝炎”。浅葱炎を司る戦女にして藤崎悠志のサーヴァント。

「俺の力の根源、プラムだ。この作戦が成功したらちゃんと紹介してやる」

凧咲から振り掛けた問いにやっと返って来た言葉に安堵しながら、今ある状況に微笑んだ。

「リビア全発動」

御上公園をほぼ中心とした円形で、悠志がいる位置と丁度同じ半径の位置に三十もの散花が出現した。

残っていた散花と新たに発動した散花が、御上公園を目指して集中する。

それに紛れて悠志もまた目的地である公園に歩を進めた。

「折角逃げて来たのにまた公園に戻るの？」

不安を仰ぐ風咲の問いに答えるべく悠志も口を開く。

「ここら周辺じゃ、鏡界への突破口が公園にしかない上に時間が限られてる。一か八かの賭けだ」

もちろん暮羽もそれを計算した上で鎖縛を展開し、新たな戦術を組み立てている。

新たに出現した散花を確認すると、付近の散花を消滅させつつ公園へと向かっていた。

また、悠志もそれを理解した上でこれ以上ない危険に自分の身を曝している。ただの邪魔者でしかない自分は、何の躊躇もなく殺されるという大きなリスクを侵して。

「我が御霊の抱擁」

普段なら人の蔓延る道路にはその影すらない。悠志の胸元が淡く光り、吊いの花冠ルフロラが首から下がった。

清淀祭。人々は歓喜に吞まれ、その一日を特別に過ごす。その中で二人の宝礼は人ならざる力を行使していた。

「手を……」

そう言っただけで差し出す悠志の手を風咲の手が掴んだ。

ひたむきに走る悠志の背を温かく見つめた。

「中々……この街の構造を理解した上でのこの戦略。やはり、ここで散らすには惜しいな」

先より出現していた散花を放り出して、新たに出現した散花へと矛先を向ける。

藤崎悠志の形をしたソレを一つひとつ貫いて、標的よりも速く戦場の原点、御上公園へと赴いた。

「他の門を探すでもなく、ここに執着した事は間違いではない。しかし時期尚早であったな」

ドスツと鈍い音を立てての着地。同時に地面を蹴って垂直に跳び上がった。

「流石にFクラスの兵号か。あれだけ周到に準備を重ねても、あつ

という間に潰しやがる」

最後の作戦に全てを賭けて、散花と共に公園へと集中する。

一つ、また一つと遠距離から潰される散花。その緊張感と焦燥感に身を包まれながら、後ろ手に繋ぐ凧咲の鼓動を受け取った。

刹那、迫り来る雷光を紙一重で避ける。その様子に気付いた暮羽は一瞬の内に距離を詰め、そこに凧咲の姿を認めると、それが”本物”であるという事を確信して、暮羽の掌が悠志の胸を打った。

大きくのけ反る。完全に姿勢を崩した悠志の胸をもう一度打ち抜いた。

煙のようにフワツと暮羽の腕が悠志の胸を貫く。紫電後の散花の時と同じく、悠志と”凧咲”の姿までが霧と消えた。

「何っ？」

一撃目の掌打には確かな衝撃があった。しかし、二度目の掌打の時は他の散花と同じく空気の層を貫くだけで、実体の手応えがまるでなかった。

暮羽が”本物”の悠志を貫いた瞬間、遠く離れた散花に凧咲の姿が移動する。

一瞬にして移動した二人に向けて暮羽の紫電が放たれ、悠志の肩を貫いた。

「設置型幻術魔法に転移を付与した超高等……？」

再び散花に移動した二人の影を認め、眉間に皺を寄せる。

一撃目を感じた右手の確かな感触。その感触が違和感にさえ感じ始めている。

パツと全ての散花と悠志の視線がブランコの数歩手前に集中する。

暮羽も周りの景色を無視して”そこ”を凝視した。

「時は満ちた」

ぼつかりと開いた正円形の門。周りを何色とも似つかわしくない靄が包み込んでいた。地球と鏡界（アニメ＝アニメス）を繋ぐ門、醜悪なソレの名を”天廟”という。

ニヤリと余裕の表情を浮かべた悠志が、暮羽を取り囲みながら天

廟へと一気に迫った。

先程までの一つひとつ潰すといった丁寧な一撃とは程遠い出鱈目な攻撃が、手当たり次第に散花と”本物”を破壊し始める。

暮羽の雷撃と素手による掌打は、残りの”一つ”になるまで徹底的に力を奮った。

確実に数を減らす散花。暮羽の的確な一撃一撃は焦りによって外す事なく、かえって精密になった攻撃が正確に的を射抜いていた。

「残り五つ」

時折手応えのある衝撃音が響き、実体がのけ反る様が暮羽の目に映る。

バチツと炭の火花が散るような音を立てて、二度三度と本物のソレを貫くと瞬く間に煙となって景色と同化した。

「転移しない……？」

そう言つて最後の二つの内の一つを消し去ると、残った一つに向けて突進した。

悠志は今まで大事に握っていた呷咲の手を放すと、暮羽の攻撃を迎え撃つ形で祝炎の浅葱炎をその身に纏う。

「手は尽きたか？ ならば……」

纏わり付く炎などお構いなしで悠志の腹部を狙つての掌打。

悠志がそれを難無く防ぐと、顎を正確に捉えた肘が迫り来る。

暮羽の肘に両手を重ねるも、それを突破して顎先を掠めた。

（危ねえ）

静寂が包み込むつかの間の安堵。

それを崩すようにして双掌打が悠志の腹を打った。

悠志の身体が地面を転がる。グラグラと揺れ動く景色に目眩を起こしながら徐に立ち上がった。

暮羽はすかさず呷咲へと詰め寄り、その主導権を握ると、深く一息吐いて悠志を見つめた。

「振り出しに戻ったな、藤崎悠志。もつとも、貴様の方は振り出しとも言えぬか？」

ふらふらと立ち尽くす悠志をよそ目にじわじわと風咲を天廟へと近付ける。

「そうでもないさ」  
微かな吐息混じりの声が響く。ハツハツと小刻みな呼吸。公園を取り巻く草木花が風に揺れる。

遠くで鳴り響く祭囃子が、幾度の雷撃によって焦げ付いたコンクリートや燃えた木々の香ばしい香りと共に流れてくる。

「まだまだこれからだよ……暮羽、数名っ」  
首に掛けた弔いの花冠の片割れを右手に掴むと、勢いよく薙ぐようにして振り出した。

悠志の右手から淡い浅葱色の光が発し、腕の延長へと光が細長く伸びた。

やがて光は次第に武器としての形を取り始める。

形質が特定される頃には光の中から剥き出しになった刀身が現れ、走り込んだ勢いに任せてそのまま袈裟斬りを放った。

紙一重。殆ど動く事なく悠志の斬撃を体の捻りだけでかわした暮羽は、寸分の狂いもなく浅葱色を点したブロードソード（刀身70〜80cmの幅広の剣）を持った右腕に紫電を放った。

その衝撃に剣は宙を舞う。悠志の右腕に体も釣られて大きく吹き飛んだ。

「ぐっ……」

焼け焦げた腕を押さえながら、徐に立ち上がる。

「どうやら今度のは本物のようだ」

体勢も立て直していない悠志の左足を再度紫電が貫く。バチンと弾ける音が鳴り、悠志はやむを得なく地面に転げた。

砂地に這いつくばる体は起き上がろうとしない。ピクリとも動かないままで吹き抜ける風に曝される。

「決したか？ ぬっ」

悠志が上空から踵落としを放つ。間一髪防ぎはしたものの反応に

遅れ、右腕を強打する。

先程まで倒れていた悠志の方へと視線をやると、そこには浅葱炎を纏った剣が横たわっている。

「ふんっ」

右腕で悠志の足を弾き飛ばすと、左手で守るようになっていた凧咲を後ろに突き飛ばした。

「雷槍の二”走雷”」  
ライティング

刹那の時を駆け、悠志が生成したブロードソードを手にとる。

逆手に持ち替えた剣を走雷の速度を活かして、悠志の”いた”空間を切り裂いた。

甲高い金属音が響く。悠志のいた場所にはもう一本のブロードソードが現れ、暮羽の一撃によって弾き飛ばされた。

「何が起こってる？」

あちらこちらへと瞬間的に移動する悠志の前に困惑する。

（この公園には既に幻術魔法の反応はない。あるのは藤崎悠志と、それが作り出した剣の反応のみ……）

辺りを見回す。そこにいた筈の”如月凧咲”の姿がどこにもなかった。

（いない……？ いや、そもそもいたのか？）

状況と現状が入り交じって混沌する。辺りを探っても悠志の反応が一つとそれに似た反応が二つあるだけ。

更には暮羽の目の前に、無傷の藤崎悠志が立ち尽くして笑みを浮かべていた。

「面白い事をするな」

フンと鼻を鳴らして手にした剣を振りかざす。悠志はそれを後ろに跳ねてかわし、宙に浮いていたもう一本の剣を手に取った。

再度切り掛かる暮羽。互いの剣は共に浅葱の炎を上げて交わる。

悠志は力任せにそれを弾き飛ばすと、更に追い討ち重ねた。

「妙だな……」

崩した体勢を即座に修正し、大振りになった悠志の胴体を刹那の

如く切り裂いた　　が、鋭い金属音を響かせて剣だけが吹き飛ぶ。  
（どうして初めから真つ向に闘わん？）

悠志は瞬時に移動した空中からの回し蹴りを放つ。

（宙での急な加速……）

逆手に握った剣を両手に持ち直して悠志の身体を思い切り切り上げた。当然のように再び金属音が響き渡り、悠志と地に横たわっていた剣の位置が入れ代わった。

（これの繰り返しばかり）

悠志が”いた”場所にあった剣は天高く舞い上がり、代わりに悠志が地面に這いつくばる。

宙を舞った剣も終いには地面へと到達し、刀身の半分程を地面に埋めた。

凧の所在を気にしながらも暮羽は手にした剣を、地面に刺さった剣と今まさに立ち上がるうとして悠志を一直線に繋いだ一本のラインに力の限り投げ飛ばした。

轟々と鳴り響く雷が伴い、さながら電磁レールガン投射砲の如く打ち出される。

悠志は目の前に刺さった剣を抜き取って、即座に空気を縦に割る。投げ出された剣は悠志の縦切りに丁度重なって地面に叩き落とされ、悠志の手に握られていた剣は鈍い音を立てて無造作に吹き飛んだ。

「……」

久しい沈黙。風音だけが静かに鳴り響き、揺られるもの全てを左右に揺する。木々の葉一枚一枚が擦れてカサカサと掠れた音を奏でる。

一拍遅れてもう一本の剣も地面に落ちた。

「あまりの速さにお得意の転移も使えなかったか？」

笑みを浮かべて悠志を見つめる。今の一撃に何かを見出だして、胸の奥に留まっていた困惑と焦りを消し去った。

「次は移かわ転せよ」

暮羽は右掌を天に向け、脇を絞めたままで体の前に沿える。空気がピリピリと弾け出し、音の響きが鈍くなった。

悠志の周囲を無数の鳥の声が取り巻く。チチチツと小さな音が重なり合い、次第に地鳴りとなって襲撃する。

「雷槍の五”千鳥”」

コンクリートの地面を砕いて進行し、足取りの覚束ない悠志の足を捕らえた。

「くっ」

酔ったようにぐらぐらする違和感が悠志の脳を襲った。

「頭がぼんやりするか？」

ニヤリと不気味な笑みの顔が悠志の目前に浮かぶ。悠志の視界には、至近の暮羽の表情すらぼやけて見えた。

「何をした……？」

虚ろな瞳に暮羽の輪郭だけが微かに映る。

「大した事はない。貴様ら人間の構造を利用したまでだ」

「俺たちの？」

地面に拘束された悠志に聞こえるように、大きく、それでいて静かに言った。

ふわふわと頭に浮かんだ言葉と景色が入り交じっては砕け、混濁しては消滅する。

千鳥による無数の振動が悠志の半規管を狂わせ、真っ直ぐに立つ事すら困難にしていた。

しかし、それ以前に悠志の手足は千鳥シールによって地面に貼付けられている。

「手の拘束は外してやろう。それでも避けられはしないがな……」

暮羽は右手を思い切り引いて、左手は鞘に納まった刀を抜くように腰に沿える。

「天翔ける八雷ハチライの沼銚ぬまじょう。剛を以って柔を殺いし、弔詞しうじを謳う参度の天災。雷槍ライテンの六”三叉槍”」

構えた左腕を力一杯に薙ぎ、左手のあった場所に生じた磁場を、

下げてあつた右掌で握り潰してそのまま千鳥シールによって捕らえられている悠志に向かって解き放った。

解放された両手に二本の剣を持ち、左手の剣を暮羽に向かって投げた。

しかし、傍を通り過ぎたトライデントの衝撃に速度を殺され、到達するまでもなく地面に墜落する。

「避けられないなら……っ」

「ダメです主君マスター」

祝炎の言葉に止まらず、右手の剣の形状が変化する。

腕に纏わりつくようにして上半分に比重の高い六角形の盾が形成される。が、強大な雷撃の前に為す術なく弾き飛ばされ、一陣の閃光が悠志を貫く。

断末魔が高らかに響き、轟音と共に静まる。悠志は両の腕を広げたままで立ち尽くし、意気を失っていた。

「藤崎くん」

戦場に似合わない優しく震えた声が少年の名前を呼ぶ。

浅葱炎を点した六角の盾が瞬く間に人型へと変形し、やがて愛まなの姿が浮かび上がった。

「ば……」

もはや「馬鹿っ」と叫ぶ意気さえ失せ、無意識の内に視線を愛へと移していく。

「やはりな」

そう言いながら、悠志が投げ、三叉槍によって墜落した剣を手に取り、剣先を地面に刺して更に言葉を繋ぐ。

「なれば、コレがあの子”娘”ということか」

右手に握った剣を伝うように小さな電流が流れ、ひび割れたガラスが一枚一枚剥がれ落ちるようにして剣の表面が欠け、やがて風咲の姿がそこに現れた。

時は遡る。

藤崎悠志が全ての散花シユウアを発動し、御上公園へと向かう最中の事。

「手を……」

後ろ手に差し延べた悠志の手を風咲が握り締めた瞬間、風咲の体は光に包まれ、愛の首に掛かっている吊いの花冠ルーフローラの模倣物へと姿を変える。

「何？」

左手に握ったルーフローラとは別の、既に悠志の首に掛かっているルーフローラから声が響いた。

「えっ？」

答えが返る前に自らのおかれている状態に驚き、思わず声を上げてしまう。

「愛、落ち着け」

悠志がそう言つと、今度は風咲が驚きの声を上げた。

「愛？」

「この声は風ちゃん？」

互いの声を聴く事でお互いを認識する。そして、自分たちが”ヒト”でない何かになっている事に気付き、改めて驚いた。

「どうなって……」

「順を追って話す。だから、まずは落ち着け」

愛の言葉を制して悠志が口を開くと、二つのルーフローラは相槌を打ち、悠志が話し始めるのを静かに待つ。

「今、俺という主帝マスターを元に、お前たちは従臣クォーツとして存在している」

緊張感が焦りを煽り、一人は恐怖、一人は歓喜を抱いていた。日常からの離別、日常の放棄、非日常の歓迎、非日常への跳躍。見方と言い方さえ違えばいくらでも言葉は生まれよう。

思考のベクトルさえ異なれど、不安の渦巻く明日みらいへの進行は二人に”希望”を浮かべさせていた。

「二人は何もしないでいい。ただ目を瞑って、事の次第が済むまで静かにしている」

二人が何もしなければ、それだけで散花の真価を隠し通す事が出

来る。そう考えて言った。

「不正とはいえ、仮にも愛は俺の従臣だ。魔術マジキに対する耐性を備えているし、魔力によって鍛えた造物は並大抵の事では壊れわせん」  
急展開を迎える話の行く末に、二度目の交戦の予兆が漂っていた。  
「ただし、凧咲は愛の存在を真似ているだけで、大した性能を付与出来るわけでもなく、故に脆い」

全身が凍り付くような錯覚が凧咲を包み、ゆっくりとルーフロアの灯を弱くした。

「だからこそ、守ってみせる」

首にかけて愛のルーフロアと、左手に握った凧咲のルーフロアを交換し、手にしたルーフロアを腕に巻き付ける。

ぐっと締め付けるようにして腕に巻かれたルーフロアは、浅葱の炎に包まれて腕輪へと変化した。

「お前には傷一つ付けさせはしない」

堅い意志に語調が高揚し、声は低くともその強さを感じさせる。  
「その為の術もある」

安心感を抱かせる悠志の断言に安堵を吐き、弱々しくなった祝炎の象徴ある浅葱炎がふわつと膨らんだ。愛はといえば、複雑な想いに萎縮しつつも凧咲に講じられた安全策に期待し、一時の安らぎをつかみ取る。

「だから安心して欲しい」

相手が自分より遙かに高みの者だと分かっているにも敢えて口にはしない。見え隠れする不安を肥大化させる意味もなかった。

「はい」

「うん」

二人の従臣は真つ直ぐな声を並べて悠志の意志を胸に刻んだ。  
定まらない未来への不安。

かつて、自らの身に代えても愛し人を守り抜くと誓った少年は、二人の掛け替えのない命を背に、その不安を拭おうとした。

だが、そう上手く話が進む訳もなく悠志の術は全て破られ、今に

至る。

一時的なものでありはしたが、F級の暮羽を欺き、万が一にも作戦は成功するところまで持ち込んだ。

本来であれば、実質的な戦力へと数えられない見習いのZ級からすれば、これ以上ないほどの称賛にあたり、実際に暮羽は悠志の実力を認めていた。

だが、悠志の求める先にはそれも称賛には到底及ばず、ただ悔やみだけが悠志の意志を崩壊させる。

”散花<sup>シレテ</sup>”。悠志の繰った術にして祝炎が祝炎である証明とも言える高等な魔術<sup>マギ</sup>。

全ての命運を懸けて発した術も、暮羽を前に無惨に散った。

第一に幻影としての視覚的幻術。これはヒトやその他地球生物に對してならまだしも、宝札に對しての効果はないに等しい。

第二に術者の分身<sup>アバター</sup>を生み出し、それぞれの存在を術者と近似させ、対象の誤認を誘うデコイとしての性能。暮羽が予め細工していた罠<sup>ワイルドスリー</sup>を検知するための術式もこれによって破棄され、鎖縛<sup>ワイルドスリー</sup>の検索機能を麻痺させる。

最後の切り札としての性能である自在転移はそれぞれに設定した存在を、近似したのから術者そのものと同等にし、また、従臣の存在をも術者と同じにする。

また、存在を同等にした散花の間を自由に移動し、従臣の位置さえも好きなタイミングで転移させる事ができる。

一目には素晴らしい性能であるが、全ての幻影を消滅させてしまえば残るは本人となってしまうことは勿論、本人含む全ての同一的存在を一カ所に集めて攻撃すれば一網打尽にすることもできる。

しかし、それらよりも一番重大な問題は存在の分配であり、これは本人の存在を身代わりにするもので、つまりは幻影としての散花が一つ消滅させられる毎に術者の”力”を削ぎ取り、全ての幻影を消滅させられた時には丸裸同然の状態に陥る。

悠志は持てる力の全てを散花に注ぎ込んだ為、全てを消滅させられた際には手にしたルーフローラを直ぐさま剣へと変貌させ、容易に消滅させられないようにした。

それでも暮羽の猛攻によって弱点を見破られ、千鳥から三叉槍シール トライデントへと襲いだ攻撃によって撃沈した。

その際に、凧咲の存在を転移させた剣を投げ飛ばし、魔力によって鍛えられた愛の剣を盾へと変形させ、攻撃を防ごうと企てるが、三叉槍の威力に負けて弾き飛ばされた。

全くの無防備になった悠志の体を三叉槍が突き抜け、勝敗は決した。

「大方そうだった小細工だろうとは感じていた」

最早、凧咲を隠す必要さえなくなった暮羽は、横で膝を折って力無く崩れた少女に視線を移し、静かに言葉を紡いだ。

悠志は依然硬直したままで動こうとせず、ただ視線だけを泳がせて形の定まらない景色を眺めていた。

「藤崎悠志、見事であった」

腕を伸ばして掌に”力”を集める。

バチバチと響く音にハッと目を覚ました凧咲は、暮羽の腕にしがみついて叫ぶ。

「駄目だって、これ以上やったら……」

凧咲の言葉を遮るように暮羽の掌からは紫電が放たれ、悠志を襲う。

「死ん……じゃ」

定めた目標へと一直線に進む紫電は、躊躇うことなく当たって弾けた。

バチンと空気を裂いて音が鳴り響く。

凧咲は音に反応し、一テンポ遅れて振り返り、そこに映る景色に絶望する。

言葉にならない声が喉をつくが、思わず口を両手で覆う。

顔面から噴き出した血が地面に流れていく。鮮明で濁りのない赤い液体は、悠志の足元まで流れていった。

凧咲はあまりの残酷な眺望に言葉を失い、地面に四つん這いになった状態でひたすら目の前に広がる景色を否定した。

しなやかな髪を蹂躪し、衣服を鮮血に染めていく。弱々しく倒れている姿には誰もが声を失い、その刹那に息を呑む。

少女の体を包み込むようにしてそれは広がる。次第に広がっていく真っ赤な液体は、愛の額から流れていた。

「見てなさい」

横たわった少女は瞼を閉じ、涙を流しながらゆっくりと吐息混じりに口を開いた。

「きつと藤崎くんは復活して、きつと私たちは貴方たちに追い付いて、そしてきつと貴方たちに勝って見せるんだから」

震える声で小さく呟いた。

そう口にしてしまつてからは一言も言葉を紡がず、襲い来る恐怖を必死に堪えながら涙を流し続けた。

「愛……」

凧咲の口から漏れる言葉に力はない。ただ悲しみだけが込み上げて、目の前に広がる現実を否定したがっていた。

「ふん、興ざめだな」

ハアツと溜め息を一つ吐いて完全に露になつた蜥蜴のような鱗で包まれた右手を携帯電話でも持つているかのように右耳に沿える。

「こちら聖界所属熾天使管轄下特別審査官、兵号F216C暮羽藪名」

地面に力無く這いつくばる二人をそのままにして、だらんと腕を垂らして座り込む凧咲を肩に背負うと、そのまま禍々しい靄を発生させている天廟へと歩を進めた。

「第一任務ならびに第二任務完了。只今より聖界に帰還する」

辺りは風と木々の揺れ擦る音だけが静かに響き、清淀祭の余韻さえ感じさせないでいた。

天廟の一步手前で振り返り、二人の負傷者を一望する。一人は立ち尽くしていた体を無理に動かして倒れ込み、もう一人は紫電の的となって気を失う。

戦場となった御上公園はあちらこちらに焦げや煤を作り、草木は燃えて原型を留めないでいた。

最後にもう一息溜め息を吐いて、視界に広がる公園内の惨状を悔いた。

「少しやり過ぎたな」

そう言つて天廟に足を踏み入れた。

スツと暮羽の体が天廟に飲み込まれ、時間の経過と共に開いた天廟は閉じ、最後には元の空間へと戻った。

祭囃子が次第に大きくなり、やがて二人は祭に参加していた子どもたちによつて発見される。

親類、友人など知人が周りを囲み、修繕された御上公園を当然のように何とも思わず、ただそこに倒れている”だけ”の二人を病院へと送った。

御上公園には暮羽と悠志によつて齎された傷跡一つ残っていない。二人は、祭りに紛れ、何者かの引き起こした何らかの事件に巻き込まれたものと処理され、二人が目を覚ました後も深くは詮索されなかった。

「ごめんな……」

病院のベットに横になつて窓の外を眺める愛に声をかける悠志。

瞳にはうつすらと涙が浮かぶ。

「どうしたのよ、別に藤崎くんが悪いんじゃないでしょ」

視線は依然窓の外に広がる悠久の空に注がれる。

「全部あの暮羽つて化け物が悪いのよ」

震えた語調でいつか見た景色、眺望、風景を思い出す。最後に目にした呷の姿が彼女の瞼の裏に焼き付いていた。

「俺にもう少し、もう少しだけ力があれば……」

「そう私を想ってくれるなら、私の願い事一つだけ聞いて」

愛は悠志のいる方向へと顔を向ける。悠志も顔を上げて愛の表情を悲痛の瞳で見つめた。

「いつもの藤崎くんに戻って、すぐに凧ちゃん追いかけてよ」

ニツと口に横に広げてにやける。

「そんでもっていつも笑顔でいて欲しいの。世界を見て欲しい。そして私に教えて」

声が小さくなるに連れて感情が高まって甲高い声になる。両手で顔を押しさえて顔を隠すように覆う。

「いつでもあなたの世界を感じていたい」

盲目の少女はぼろぼろと零れ落ちる涙を布団で拭い、顔を布団に埋めて思いきり泣き叫んだ。

## A C T ・ 6 堅忍不拔（後書き）

いかがでしたでしょうか？

初めての戦闘シーン。同じ語が何度も出てきたり、聞きなれない言葉がいくつも出てきたりで困惑したかもしれませんがね^^；

同じ語が何度も出てくるのは私個人の語彙量のなさが原因なので、以後も精進していきたいと思います

さて、ここで一応報告という形で皆様にお伝えしたいことがあります。

それは、前回までの間に一人称と三人称がありました。それら全てを三人称に統一し、全体の構成をまとめたということです。

つきましては、A C T ・ 2やA C T ・ 3の内容が変更されるということ。ことで皆様にもご迷惑をおかけしますがご了承ください。

また、そちらの編集に時間を割かなければならないので、次の「A C T ・ 7 獅子奮迅」の更新は今回の如く遅くなる可能性があります。

そちらの方もご了承頂けると幸いです。

また、皆様からの応援メッセージや、間違い報告、質問などを頂ければ、より一層モチベーションが上がるので更新する意欲が沸くかもしれませんw

一言でいいです。もしよければご連絡ください

では、長くなりましたがこの辺でA C T ・ 6 堅忍不拔を終わりたいと思います。

次回またお会いしましょう

## ACT・7 獅子奮迅（前書き）

さて、7回目の更新となりましたノルンの足枷。

ずいぶんとお待たせいたしました^^;

もっと早くに終了するはずだったのですが、諸々の事情というやつで一ヶ月以上も遅れてしまいましたorz

今回の更新で、2〜3章部分の一人称を三人称へと変更し、それに伴って箇所々々の文章が変更いたしましたがストーリーには変更ないのでご安心ください^^

では「ACT・7 獅子奮迅」をどうぞ

ACT・7 獅子奮迅

彼があなたを怒るのは、あなたが林檎を食べたからじゃない。

彼があなたを助けるのは、あなたが罪を背負っているからじゃない。

彼があなたを選んだのは、ただの興味本意ではなかったのだから。

Milshelc Ainia

鮮血の月が不気味に浮かぶ。星雲よりも一層映えて、いつもと違った表情を見せる満月。

御上公園。約一ヶ月前には此処で人外による戦闘が行われ、辺り一面を惨場へと変えた。

今そこに再び二人の影が浮かぶ。争いの当事者である藤崎悠志とその争いによつて視力を失つた笠音愛。

愛は鏡界（アニメリアムス）に入るに足る器を身につけ、正式なパートナーとなつて悠志の横に立っていた。

両目の瞼には縫い止められるようにして細長い鉄の糸が這う。彼女たつての希望であり、それが彼女に大きな力を齎した。

自分は目が見えない。それを認め、心に刻む事で彼女は宝礼シミアとして生きる術”ジン”を受け入れる器を手に入れた。

「この一ヶ月、長かつたようで短かつたよね」

陽気に口を開く女性のは、黒を基調にしたスレンダーなワンピースに身を包み、目の前に開いた天廟の方向へと顔を向ける。

「もう一ヶ月か……早いもんだな」

愛の手を取り、天廟を見つめる。

「さあ行こつか。私たちの関係を深めるために」

おどけて見せる女性の顔は満面の笑みで、一瞬顔をしかめた悠志も直ぐに微笑んで愛を見つめる。

「ああ、そうだな」

悠志の紡いだ予想外の言葉に表情を一変させてエツと驚く愛。かと思うと次の瞬間には悠志の右腕に思いきりしがみついた。

「藤崎くん、だーい好き」

空には鮮血の月が浮かび、二人の旅立ちを温かく見守っていた。

静寂。無機質な空間にコツコツと床を叩く音だけが静かに響く。

真つ白な太い石柱が幾本も左右対称に並ぶ。左右に並ぶ石柱の真ん中を陣取るようにして真つ赤な絨毯が敷かれていた。

ギーツと木が軋むような音を響かせながら巨大な門が開かれる。

白い甲冑に身を包んだ暮羽数名。その傍らには布を被せただけのようなローブを着た如月凧咲の姿があった。

完全に開ききった門の正面に立ち、そこに並ぶ数十もの甲冑に身を包んだ兵士を見て驚嘆する。

「兵号F216C暮羽数名、只今帰還しました」

しんと静まり返った空間に暮羽の堂々とした言葉が呼応する。凧咲は正面の玉座に腰をかけた人物を見据える。

背に生えた三対六翼の純白。一切の曇りがない翼には神々しさが見て取れた。

「ご苦労」

さつと手を払い、暮羽に下がるよう命じる。暮羽は並列する兵士の中に参入した。

同時に横に並んだ兵士が互いの正面に立つ兵士に向けて剣を掲げる。最後尾の兵士が二人、凧咲の脇に立って剣を眼前に添え、左手を

後ろ腰に据えた。

左右の兵士は一步前へと進み、立ち止まる。ガチャガチャと金属が当たったり擦れ合う音が響いた。

訳も分からないまま風咲も一步前へと進むと、続いて二人の兵士も一步前へと進んで立ち止まった。

規則的なテンポで玉座に座する人物の数歩手前まで歩く。

緊張して強張った顔をパツと上げて、そこで自分自身を見つめる天使に視線をやった。

一時の沈黙。耳鳴りするほど静まりきった空間が、無言の緊張感を与える。

「汝が如月風咲だな？」

「……はい」

一瞬戸惑って言葉を返す。言葉一つが恐ろしい程に緊張と恐怖感を発する。

「なるほど……では汝が我が元に連れて来られた理由を知っているか？」

「いえ、特には聞いておりません」

宝礼としての器が大きいという事しか知らない風咲は、誤魔化すでもなく丁寧に応える。

胸の鼓動はかつて体操部の大舞台に立った時よりも高く大きく高鳴り、声は震えていた。

「率直に言おう」

再びの静寂。何度訪れても慣れる事はない。ピリピリとした空気に息が詰まる。

「汝は、この聖界を統べる神の候補に選ばれた」

瞬間、沈黙していた兵士たちがざわつき始める。暮羽自身も真の内容を聞いていなかった為に心底驚いた。

しかし、それよりも当人である風咲は、目を見開いて頭の中で木霊する言葉に驚愕していた。

俗に神官と呼ばれるであろう姿をした者たちが兵士たちのざわつきを鎮める。

「これより決理の儀を始める」

天使は玉座から立ち上がると、右の掌を反して掌中に点した光を

爆発させた。

視界が光に埋まる。次第に景色がひらけて木柱や畳などの和風な眺望が広がる。

正面には六翼の天使が手を翳した形で立つ。

「お主が元の娘かの？」

皺枯れた声が丁度真後ろから聞こえる。

凧咲は慌てて振り返ると、そこには微笑みを浮かべた一人の老人が背の低い椅子に座っていた。

表情は柔らかく、居心地の良ささえ感じる温かさは、強張った凧咲の体を解した。

「はい」

老婆の方へと向き直りながら、語調を強くもって返事した。

「うむ。では熾天使よ、下がってよいぞ」

「御意に」

老婆の言葉に頭を下げ、三歩足を引く熾天使。左から足を折って正座の形を取った。

数秒の安閑を過ぎ、老婆は口を開く。

「儂の名は”天照大御神”あまてらすおおみかみ。皆には大御と呼ばれておるからの、そなたもそう呼ばばよい」

古事記に名を連ねる三貴神が一柱。太陽の神と崇められ、高天原を治める女神。

凧咲はその三貴神の一柱が目の前に存在し、自らと会話を交わしている事に恐れをなした。

「天照……」

相手のあまりの大きさに口が上手く開かなく、名前だけが喉をついて出る。背後に座した熾天使の存在すらも霞んで、本来の偉大さを物語る後光すら失わせていた。

「儀を……」

両手を膝の上に乗せ、丁寧に正座する熾天使の姿はどこか違和感

を感じさせる。米国人が日本文化に触れている様子に偏見を持つ考え方に近いものだろうか、それともそれ以外の何かがそう感じさせるのかという思考が凧咲の頭の中を渦巻く。

「そうじゃな、皆も待っておろう」

実際は兵士たちがいる空間と凧咲たちがいる空間では時間の流れるが異なっているため、凧咲たちがこうやって過ごしている間も、兵士たちにとっては一瞬でしかない。

ゆっくりと閉じた瞼を、またゆっくりと開いて凧咲に焦点を合わせる。

「如月の名を継ぐ者」

何かを告げようとする天照の前に息を飲む凧咲。白いローブが静かに靡き、ふわっと揺れる。

「元禊げんすい白姫しろひめ」

色号を載せた名が紡がれ、半秒ほどの沈黙。凧咲にはその名が何を指すのか、何を意味するのかは全く分からない。それでも天照が紡ぎ出す言葉を真剣に聴き入れ、一つひとつを記憶にしていくな。

「元禊は神名。白を色しほとし、姫を俗号とする」

柔らかな日差しが障子の細かな隙間を縫って、青い香りを漂わせる真新しい畳をほのかに照らす。

天国、と言われれば確かにそう感じる事さえ出来る空間には、緊張感の蔓延る現在でも常に安閑を匂わせていた。

「選えらび給えよ、己の行く先を。己が名を」

凧咲を挟み込むように前方には天照大御神、後方には熾天使が座している。

兵士たちの待つ宮廷の中では真つすぐに並んだ兵士たちが背筋をピンと伸ばして二人の帰還を待ち侘びる。

凧咲は自分と相手との格差に怯え、恐れ多さを覚えていた。

「如月凧咲。汝は選えらぶ事が出来る」

不意に動いた熾天使の唇。天照とは違い、絶対的冷徹なイメージを受ける語調は、たった一言で解れていた凧咲の背筋をシャキッと

伸ばす。

「色名を授かり、この聖界を統べる神の一柱になるべく修練を積むか」

もう何度も息を飲んだ所為か、段々と息苦しくなってくる。心臓は今にも破裂しそうなほど高鳴り、今までにない焦燥感を与えていた。

「色名を放棄し、鏡界に対する記憶とそれに依存する力を失って地球に引き返すか」

二者択一。限りなく自分と掛け離れた存在の神となるなどという事は有り得なく、折角手に入れた力と知識を棄て、地球で今までと同じ平穩でマンネリ化した生活を送るのもまた然別であった。

「神となったあかつきには、それ相応の褒美と様々な権利を授けられる」

安閑な空間に響く鋭い声。

熾天使だということも忘れ、耳を傾けて相手の言葉に聴き入っていた。

「その権利の一つに」

より一層熾天使の言葉の一言一言を聞き漏らさないように集中する。

「『己が部隊をもって我がものとすべし』という自らの目的の為に適当な人員を操る権利がある」

自らの目的を遂行すべく、自ら選んだ宝礼を自らの好きなように動かす事の出来る権限。簡単に言えば自分の願いを叶えるためだけに宝礼を働かせる権利である。

「一人の人間を助ける為に体を張った誰かを、自らの管理下に置けるとも言い直せるな」

意味深に響かせる言葉はいくらも柔らかくなかったものの、それでも鋭さを失わない。

自らの境遇を皮肉に言った熾天使の言葉を、はっきりと確かな形で受け取って、そこに相手の意図する所を感じた。

「わかりました」

天照に背を向け、熾天使を睨み付ける。

「その色名というものを受け取ります」

視界に入った兵士たちがざわつくのを感じる。

「それほど容易なものではないぞよ？ それ相応の覚悟はあるか？」

「はい」

間髪空けずに強く応える。瞳孔を大きく見開いて言い放った。

色名を授かる事を承諾した事にざわめくのか、熾天使を睨み付けている事に騒ぐのかは分からない。

ただ、肝を据えた少女が堂々とした威勢で熾天使に反発しているという雰囲気だけは充分に感じさせていた。

膝の上に両の掌を乗せた丁寧な正座で座る熾天使が、コクリと首を縦に振る。

その表情は喜びに富んでおり、先ほどまで目にしてきた熾天使とは別人のように感じさせた。

「うむ。多少強引ではあるが、決理の儀もこれで終わりじゃ」

久しくさえ感じる天照の声。よほど熾天使の言葉に集中していたのか、凧咲の感覚では数秒が数分に、数分が数時間にさえ感じられていた。

兵士たちの視界からは完全にその姿を消した三人。隔離された空間で穏やかな声が飛び交う。

「元禊白姫」

早速与えられた名で呼ばれる凧咲。皺枯れた声は依然として安心感を感じさせる。

「そして如月凧咲よ」

二つの名を手にした違和感がぞわぞわと鳥肌を立たせる。

「お主の決心、感謝する」

天上の真神が紡ぎ出す言葉は、不思議と凧咲の胸に突き刺さった。「これで元禊も我と同じ地位に立った事になるな」

「えっ」という声と共に驚嘆する。熾天使が紡いだ言葉は、凧咲の心を震わせた。

「改めて名乗ろう」

チクチクと空気が突き刺さるように押し寄せるのが感じられる。

「我が名は”赤帝ウリエル”」

新たな色名が高らかに響く。

「ウリエルは神名。赤が色、帝は俗号」

高鳴りする心臓は高揚感で鼓動し、凧咲を奮わせていた。

互いに向かい合って目の前に座る者同士見つめ合う。

「我と元禊は同格の存在。故に互いの名は神名で呼び合う」

今までとは違った感情が露となって体をほてらせる。

「ウリエル……さん？」

「そう、そしてお前の神名が元禊だ」

遙か遠くにさえ感じていた神々しい熾天使を前に、どこか違和感を感じる凧咲。

「それに我ら色名を受けた者は、互いに仲間であり、同時に好敵手でもある」

好敵手という言葉がどのように作用するのか。そういった不安が凧咲を取り巻く。

「”さん”などというよそよそしさなど捨ててしまえ。どうしてもそう呼びたいのであれば無理には言わんがな」

急に距離を詰めた二人の関係は、種族を通り越して密接に交わろうとしていた。

「ここが聖界コトアキアで、今まで過スぎて来た世界とは異なつた異世界、”鏡界”であることを改めて再認識した。」

「でも、どうして私を？ そもそも好敵手ライバルなんていない方が神様に選ばれる可能性としては高いのでは？」

会話の脈絡が複雑に絡み合って蛇行する。

「理由もなく色名を授けられる者はおらんよ」

天照が口を開き、続ける。

「お主には神としての素質とそれに足る器に恵まれ、更には”如月の名”を継ぐ者として色名を授けられるのが当然とも言えるからの如月の名。その語がどのような意味を指すのかは分からない。しかし、そこに重要な何かがあるのは確かだった。

「故にお主は決理の儀を介して色名を授かる事となった。他にも理由はあるのじゃがな……」

更に続くであろう話に耳を傾ける姿勢を見せる。しかし、それを遮るようにウリエルは言葉を挟んだ。

「大御様、兵たちを待たせております。その折りはこちらで話しますので……」

「そうじゃな、では儂もここいらで席を外すかの」  
首肯して風咲を見つめる。

「選ぶのはお主じゃよ」

朗らかな微笑みが老婆の顔に浮かぶ。顔面に幾つも皺を寄せて、温かな雰囲気を醸し出していた。

「いついかなる時も、自分が選んだ道が最善の道じゃて、何も悩まんでええ」

微かに俯いた風咲の頭を撫でるように眺め、ゆつくりと視線を落とす。

「理性のままに生きればよいよ」

満面の笑みを浮かべて、一回り大きく強調して口にした。

風咲もハツと顔を上げ、紡がれた言葉を噛み締めて思い切り「はい」と返事した。

鏡界を知ってから次々に起こった事柄に様々な落ち度を感じていた風咲は、たったの言葉一つで胸の内に渦巻く靄を掻き消した。

石膏で塗り固められた壁と石柱が視界を埋め、真ん中を堂々と赤い絨毯が走る。

数段高くなった所には玉座があり、ウリエルはそこに座って肩肘を

着いている。

二、三十の兵士は片膝を着いて、腰にかけていた鞘を眼前に構え、刀身を10センチばかり抜いた形で制止していた。

「元禊白姫」

ウリエルの目の前で兵士と同じ姿勢を取り、きらびやかな装飾の施された剣と鞘を眼前に構えた。

「聖界に於いて色名を授かりし者」

形だけの儀式が執り行われる。

兵士諸君はこの儀式こそが決理の儀だと信じて、冷や汗をかきながら真剣に立ち振る舞っていた。

「神名を元禊、色を白とし、俗号を姫とする」

高らかに謳われるウリエルの声が、凜と響いて宮内に木霊する。

「天照大御神様より授けられし此が名を我が物とし、以後の世を渡る事を誓うか？」

既に天照の前で決めた事をそれが当然であるかのように紡いでいく。

返事とほぼ同時にカシャツと音を立てて刀身を鞘に納めた。

「誓います」

仮初めの儀式は流れるように次々と進み、数分と経たぬ間に終了した。

本来口外することのない色名を家臣の兵士たちにさえ伝え、自らの色名の隠蔽を謀るウリエル。

凧咲もそれを承諾し、自らの色名を知らしめた。

そもそも色名の意味を知る事は、色名を授かった者或いはそれ以上の地位に立つ者しか知る権利はなく、凧咲もまたその内容を詳しく教えられていなかった。

故に自分の色名を兵士間ではいえ周知される事を承諾していた。

適当な形式をあてた形だけの決理の儀も終わり、凧咲はウリエルと共に宮廷らしき造形をした建築物のただっ広い廊下を歩く。

「何処に行くんですか？」

背に生えた六翼が飾りであるかのように、全く翼を羽ばたかせず、浮遊という状態に限りなく近い状態で足も付けずにスーッと廊下を進んでいく。

「黒き豊饒の女神（シユブニグラス）と呼ばれる、鏡界を形成する根源となったもの……だと聞いているが、今からそこへ向かってもらう」

視線はまっすぐ前を向いて意識だけを風咲の方へと向けるウリエルとは違い、視線も顔も意識も向けて覗き込むように見つめる風咲。「私一人ですか？」

「いや、暮羽に案内させる。面識のある者の方がよかるう？」

風咲の纏ったローブが床を擦り、掠れた音が出る。純白の生地は神聖な雰囲気醸し出しており、決理の儀に於いて風咲に緊張感を与えた一因でもあった。

恐らく高価であろうローブを出来るかぎり床に擦らないよう気を配りながら、ウリエルに合わせてゆっくりと進む。

「暮羽さんか……」

「不満か？」

「あ、いえ。あの時約束守ってくれなかったなって思い出しちゃって」

慣れてきたのか、語調が段々と柔らかくなる。

初対面の当初と比べれば、天地の差とも言えるほどその差は歴然であった。それでも相応の敬意を払って言葉を選んでいる。

「アレは予想外だったな」

多少微笑んでいるように見えるウリエルの表情が楽しそうにさえ感じる。

「まさか、あの”暮羽”が我の勅にさえ背くとは……」

「勅？」

視線は依然前を向いたまま表情が朗らかになったウリエルの横顔を眺めて問いかける。

「我は暮羽に二つの任を与えた」

自然と相手の言葉に吸い付くように耳を傾ける凧咲。地球では有り得なかった現状に心底から喜びを感じる。

「一つは天照大御神様の勅命でもあり、如月凧咲という少女を我がもとへと連れてくる事」

詳細な内容とまでは言えないが暮羽薮名が言った言葉。それについて自分以外の人間には手を出さないで欲しいと訴えたが、それも虚しく終わり、事もあるうか藤崎悠志だけでなく笠音愛にまで大怪我をさせてしまった始末。それらいくつもの失態を抱え、汚名を返すべく神となり、藤崎悠志を自らの支配下へと置く為に決理の儀で決心した。

「そしてもう一つが、新兵の目的を調査するためのテスト」

藤崎悠志を助け、聖界に導いたのはウリエル本人。しかし、聖界では忠義というものが絶対であり、一部を除いては上下関係に厳しいところでもある。

その忠義がどれほどのものか、或いはそれ相応の想いがそこにあるかなど、実に判断が難しいシビアな試験である。

「そんな事が……。あ、それじゃ藤崎くんはどうなっただんですか？」  
時間が二人の距離を詰めていく。よそよそしさこそ少なからずあれど、次第に相手の調子に溶け込んだ。

「合格だよ。しかも、素質に恵まれた将来有望な新兵だとさ」

自ら誇らしげに語るウリエルの言葉を耳に、凧咲の胸が高揚感に躍る。

「ホントですかっ」

思わず声を高らかに上げ、廊下に木霊する声が幾度も響いて余韻を残していく。

「ああ、その折りは黒き豊饒の女神（シュブニグラス）に向かう際に本人に聞けば良い」

「はい」

不幸中の幸いというべきか、藤崎に対する報せが凧咲の語調を跳

ねさせる。

目先には扉が開き、外から光が差し込む。

「待たせたか？」

「いえ」

ウリエルの言葉に即座に反応する暮羽。甲冑を脱いで地球の時のように黒い軽装に身を包んでいた。

「元禊を頼んだぞ。仮にも色名を受けた人間、万が一もないようにな」

「御意」

短く応えると、身を屈めて風咲の横についた。片膝を地面に着けて、頭を下げたまま名を紡ぐ。

「兵号F216C暮羽数名。黒き豊饒の女神（シユブニグラス）までの案内をさせて頂きます」

引け目のような違和感が風咲を覆う。目の前で膝を着いた暮羽が、体を丸めて遜へりくだっていた。

ACT・7 獅子奮迅（後書き）

いかがでしたか？（とお決まりの台詞

あまりにも突飛したシチュエーションだと感じた方もいると思いますが、これが私の作風です。

今後もうこういういきなりの表現があると思いますが、今後ともお付き合い頂けたらと思います。

では次章「ACT・8 尊皇攘夷」にてお会いしましょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3670e/>

---

ノルンの足枷

2010年11月27日15時27分発行